

**2013年度
活動報告書**

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for Liberal Arts

2013年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

はじめに

締めくくりのことばとして

教養研究センター 所長 不破有理

教養研究センターは2012年の開所10年を機に、企画の公募制やキャンパス間の知の連携・交流を進める活動を推進・展開してきました。多くの方々に活動に関わっていただくことでセンターへの理解を広げることはもちろんですが、企画者自身の教育や研究の関心を掘り起してつなげる人的交流の糸口を提供し、ひいては日吉キャンパスがより充実した学問と教育の府となることにつながってほしいという願いが込められています。私事ながら四年前に所長に就任した際に、教育と研究は車の両輪であり、いずれの活動にも必要不可欠で、両輪は互いに支え合う存在であると記しました。新鮮な知は絶えず研究に従事することで教育に還元できると考えるからです。教養研究センターは専門が特定されず学部の枠を超えた存在であるからこそ可能になる実験的な取り組みを進め、どなたでも参加できる開かれた環境を作ることが本センターの役目であろうと考えています。この四年間、さまざまな方にご協力いただきました。謝辞をこめて本活動報告の緒としたいと思います。

「みいだし、つなげ、ひろげる」——これは教養研究センター開所5年を過ぎて外部評価を受けた際のシンポジウムで掲げられた標語です。あらためてこの三つのことばに照らしながら、センターの活動を振り返りたいと思います。慶應義塾ではキャンパスごとに多様な教育が行われ研究が蓄積されていますが、キャンパスが異なるとほとんど交流がないのが現状です。まず「みいだし、つなげる」活動として、種村和史副所長が牽引する「学びの連携プロジェクト」があります。この学びの連携の萌芽は、社会地域連携の進むべき方向を模索して開催したワークショップに遡ります。前センター事務長の柴田浩平氏のご尽力により、湘南藤沢キャンパスの金子郁容先生と飯盛義徳先生をご紹介いただき、加えて、三田キャンパスからは商学部の和気洋子先生や新保一成先生、さらにシステムデザイン・マネジメント研究科のご協力もいただき保井俊之先生から、各ご専門分野での取り組みをご紹介いただきました。その結果得られたのは、キャンパスも専門も異なるものの、それぞれの事例研究を支える学問手法は、センターの「アカデミック・スキルズ」の体系化に資する可能性があり、かつまた日吉キャンパスの人文系専門領域の学問を教養教育として教える際の方法論にも援用できるのではないかと、という発見でした。さまざまな交流や学び合いによって、本センターの教育・研究プロジェクトが始まったといえます。

同様に、交流から生まれた企画として実験授業「日吉学」があります。同じく2012年に、日吉リサーチポートフォリオ（HRP）——日吉キャンパス全体で展開されている研究活動の内容と成果を慶應義塾内外に広く紹介し、社会に還元する発表会——において、体育研究所の村山光義氏とシステムデザイン・マネジメント研究科の神武直彦氏、HRPの委員の方々と共同で、参加型キャンパスデザイン・ワークショップ「Hiyoshi3.0: キャンパスをキャンパスに！」を開催しました。この経験が、実験授業「日吉学」の出発点となりました。キャンパスを歩き、発見をして得た着想を、新しい研究・教育の交流を生み出すキャンパス創りに向けて、学生・教職員合同でアイデアを出し合おうというワークショップです。多くの学生、大学院生、教職員、なぜか学生の父兄まで参加し大盛況。日吉キャンパス・ヴィジョンを設計したおひとりである湯川武先生と初代センター所長羽田功氏にもご登壇いただきました。湯川先生が「隔世の感があるなあ」と、打ち上げの場でお酒を飲みながらつぶやかれた嬉しそうな様子が忘れられ

ません。その湯川先生も本年3月に逝去なさいました。湯川先生が残された「読書・古典・教養」(『三色旗』2006年10月号)で、現代の教養について一文をしたためておられます。情報があふれる現代だからこそ、「自分自身の見識で発見し、選択し、咀嚼し、再構成し、発信する総合的な力」が必要であり、現代においてそのような「創造的構成力」が教養であり、そのような教養があつてこそ、分裂しがちな「心」と「頭」と「体」が統合されよりよく機能するのではないかと語ってらっしゃいます。もしかすると、「日吉学」とはそのような教養の力をつける授業になるのではないかという予感と期待を抱いています。キャンパスを歩き観察をし、発見をして得た着想を、学部・学年の枠を取り払ったグループで共有しアイデアを生み出すという枠組みを踏襲しつつ、日吉の歴史・自然・地形の観察体験をグループワークと討議を通して、自らの発見を共有化し考えをさらに深めまとめ発信する、観察と発見と問題解決(実はこれは直感を大切にデザイン思考とも呼ぶらしいことをSDMの新刊テキストで学びました)、このような一連の知的な行程を辿る学習プログラムとして育てることができれば、教養研究センターが目指す座学と身体知の統合による言語知の育成にもつながることを期待しています。慶應義塾が誇るべき一貫教育の人的な教育・研究の資産を、「日吉学」のような教育プログラムで活用する機会はこれまで皆無であったとってよいのではないのでしょうか。教養研究センターは慶應義塾の教育・研究の知を見出してむすび、つなげ、学び合うことによって、新しい教育のプログラムを試行していけるでしょう。

実験的な取り組みを続けることは、時として心身ともにつらい面もあります。創り出すワクワク感を持続させるためには、新陳代謝が必要でしょう。所長としての任期を2014年9月に迎えます。任期を何とか全うできるのも、前所長の横山千晶氏、武藤浩史氏、関西へ移籍なさった吉田恭子氏、現副所長である種村和史氏、大出敦氏、篠原俊吾氏たちの筆舌に尽くしがたい貢献の数々、日水邦昭氏をはじめとする有能な職員スタッフのみなさんの適切なアドバイスと献身のおかげです。あらためまして、心より御礼を申し上げます。

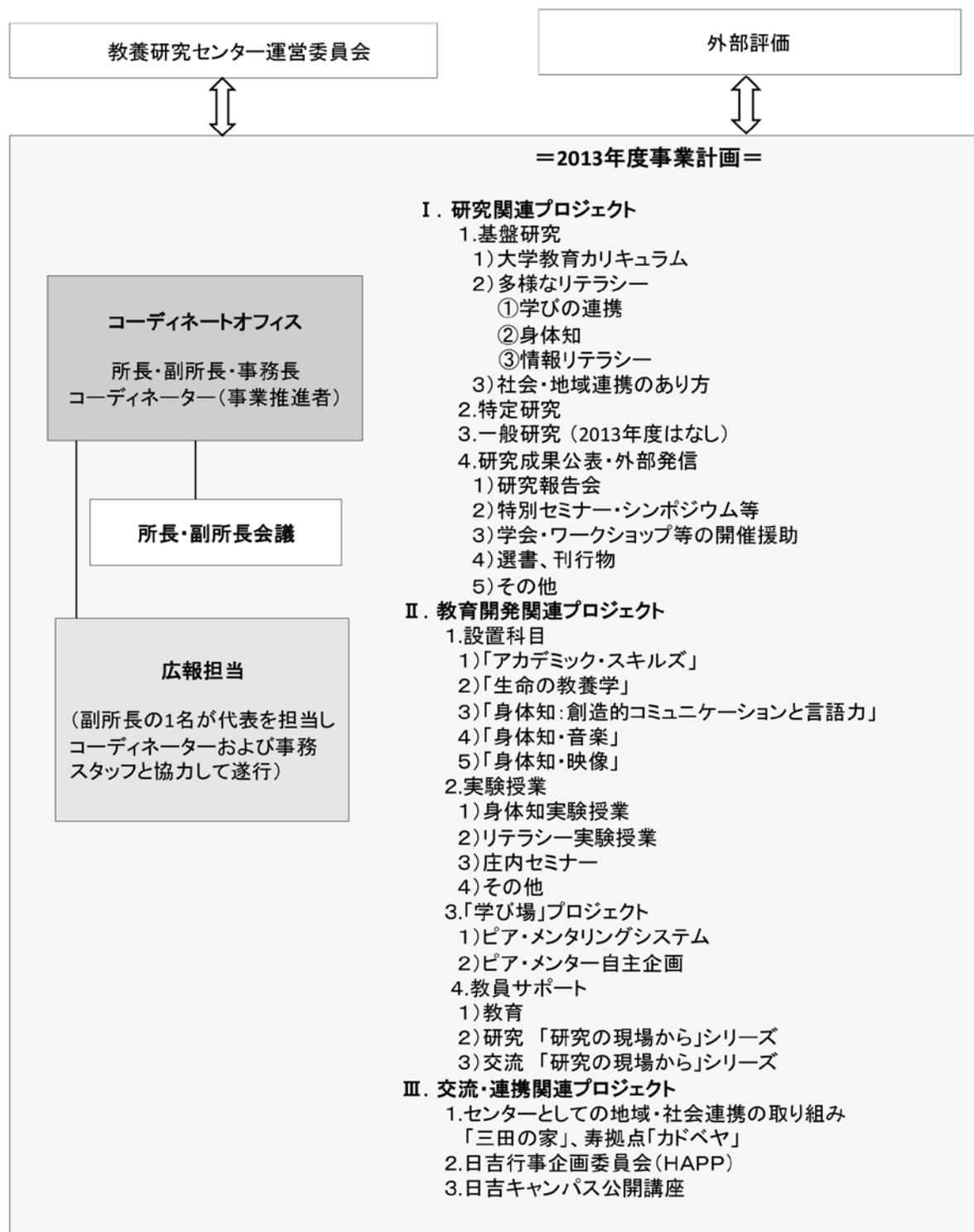
今後とも、教養研究センターのために、多くの皆様からのご助言、ご指導を心よりお願い申し上げます。

目 次

はじめに	03
組織構成と事業計画（2013年度）	06
2013年度事業報告	07
学生論文コンテスト	10
広報・発信	11
I 研究関連プロジェクト	
1 カリキュラム研究	14
2 学びの連携プロジェクト	15
3 情報の教養学	16
II 教育開発関連プロジェクト	
1-1 アカデミック・スキルズ	17
1-2 身体知：創造的コミュニケーションと言語力	18
1-3 身体知・映像	19
1-4 生命の教養学	20
1-5 身体知：音楽	21
2 実験授業	22
3 「学び場」プロジェクト	25
4-1 教員サポート講演会	26
4-2 研究の現場から	27
5 庄内セミナー	28
III 交流・連携関連プロジェクト	
1 三田の家	29
2 カドベヤ	30
3 日吉行事企画委員会（HAPP）	31
4 日吉キャンパス公開講座運営委員会	33
資料編	
1 教養研究センター運営委員会委員	35
2 教養研究センター組織構成員	36
3 2013年度の主な活動記録	37

※ I～IIIの分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では便宜上、各プロジェクトを3つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

教養研究センター組織構成と事業計画(2013年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

1. 基盤研究

基盤研究としては、事業計画に明記されているように、「大学教育カリキュラム」、「多様なリテラシー・学びの連携」、「多様なリテラシー・情報リテラシー」、「社会・地域連携のあり方」がある。詳しくは各項目を参照されたい。

(1)「大学教育カリキュラム」

2013年度の基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」は、「学期制度の国際化に関する研究」として行われた。2012年に東京大学学長によって「秋学期入学問題」が提唱され、論議が高まる中、大学内外における学期制についての情報収集とともに、2013年6月27日にはシンポジウム「学事日程と日吉キャンパス」が開かれた。金田一真澄(理工学部)「学期制をめぐる学内論議について」、種村和史(商学部)「学期制論議において考慮されるべきポイント—日吉キャンパスの教育という視点から」、佐藤望(司会)(商学部・教養研究センター基盤研究座長)「教養研究センターにおけるカリキュラム研究と学期制」の3名の報告のあとに、清家篤塾長にディスカッサントとして加わっていただき、60名を超える教職員が集まる中、活発な意見交換が交わされた。このシンポジウムの内容は、報告書として作成しウェブ公開された。

(2)「多様なリテラシー・学びの連携」——学びの連携プロジェクトの推進

義塾で展開されている様々な教授法を学び合い、自分の専門分野を教養教育として提供するための新たな可能性を探るプロジェクトである。活動計画のうち、SFCのケース・メソッド研究会の協力により、ケース・メソッドを学ぶワークショップ「学生の主体性を育む教育方法の探究・ケースメソッドの多様な応用可能性について—危機時における責任者の意思決定のケースを題材に—」を2013年8月3日に開催した。今後の展望として、モノとしての書籍の理解を教育の素材として活用するワークショップを2014年度にむけ計画している。

「多様なリテラシー(情報リテラシー)」分野の活動の一環として、「情報の教養学」講演シリーズでは8回に及ぶ講演会が開催された。講演者の許諾を得た講演はすべてWeb上で視聴可能な教材として提供されている。

(3)社会地域連携のあり方

2006年9月、慶應義塾大学教養研究センターの研究プロジェクト、学術フロンティア「超表象デジタル研究プロジェクト」の一つ「インター・キャンパス構築研究」の一環として始まった「三田の家」は、長期的には慶應義塾と港区の共同事業である「芝の家」プロジェクトとも連携しつつ、大学と地域の協働による21世紀的学生街の創出を目指した。「三田の家」の所有者の事情により、創始メンバーの一人熊倉敬聡氏(前理工学部)のこたばを借りれば「開かれて閉じていく」ことを目指すクロージング・セレモニーが10月に開かれ、2013年10月26日で活動を終了した。最後の日々はTBSで放映された。

横浜市寿町での活動は教育GPが2012年3月に終了後も横山千晶(法学部)の尽力により「カドベヤで過ごす火曜日」として継続している。横浜市の事業「ヨコハマアートサイト」にも採択され、地元からの認知も定着している。

2. 設置科目の充実化

(1)「アカデミック・スキルズ」

2013年も設置クラス数に変化はなく、日本語クラス3、英語クラス1が開講された。昨今の剽窃問題から注目を集めることも多くなった「アカデミック・スキルズ」は、半年半教の取り組みとして内外で評価されている。毎年担当者も設定テーマも変化するため、その実験的な授業構成は継承されている。授業内では3人の教員が共同で指導する態勢を維持しながら、担当教員の組み合わせによって異なる専門分野の手法を学び合い、テーマ設定から論文執筆・完成まで、学生のためによりよい指導を行うための調整を毎年行っている。「アカデミック・スキルズ」を修了した学生による学習相談は日吉図書館との連携により深化を見せ、後述のように他キャンパスで同様の取り組みを行う学生グループとの交流連携や学習相談員による学習に悩む学生のための企画展示、さらに相談体験をもとにレポート執筆法の書籍を刊行することになった。

(2)「身体知」科目

「身体知・映像」では「短編小説の映画化を通しての授業手法の開発と発信」のために活動を行った。2013年度は履修希望者そして履修者の増加に伴い、共同学習のあり方を模索し、一定の教授方法を導き

出す年となった。劇作家で演出家の松井周氏、映像作家の小泉明郎氏をお迎えし、映像言語と脚本の書き方、エチュードの行い方を前期、後期を通して繰り返し身に付けていく教授法をとった。このクラスでは前期では映像作品の作り方として、まず「最初から結論を作らない」、「話を関係のない論理から撮りにいかない」ことを鉄則に、エチュードと議論を重ねていく教授方法をとった。こうして決められた時間があるものの、そのなかでしっかりと時間をかけること、結論を急がないことという共同学習の基礎を作り上げた。そして後期は文学作品を映像作品にする作業を行ったが、2013年度はレイモンド・カーヴァーの『大聖堂』を原作として、二つのグループで別々の翻案で作品を制作する作業を行った。作品の成果発表会は、前期は2013年8月5日、後期は2014年3月2日に行い、一般に公開することで、多くの感想を得ることができた。同時にこのクラスでは受講者がTAとなって後輩たちの指導に当たることも特徴である。今後もこの読む、議論する、書く、撮る、批判される、というステップを踏む言語と身体と映像をつなぐ共同学習を行っていく予定である。(横山千晶・坂倉杏介担当)。

「身体知・音楽」は、これまで以上に活動的であり、一年を通じて9回の演奏会を催した。2013年度の活動として特筆すべきは、慶應義塾大学コレgium・ムジクム・オペラプロジェクト2013と題して、モーツァルトのオペラ《コジ・ファン・トゥッテ》を12月21日・22日、1月4日・5日に計4回の公演を実施したことである。本事業は、住友生命保険寄附講座としても運営され、かつまた未来先導基金の支援も受けた。総合芸術としてのオペラは多くの労力が求められる。オーケストラと合唱の舞台作り、衣装、プログラム、イタリア語上演であったため日本語字幕の制作に至るまで、すべて手作りで、かつまた当日のオペラ公演の運営も学生が担当した。心配されたチケットの売り上げもすべての回でほぼ満員で学生と教員の共同によるオペラ公演は成功裏に終了した。詳細は「身体知・音楽」(石井明・佐藤望担当)の項目を参照されたい。

3. 実験授業の推進とワークショップの開催

(1) 「エディティング・スキルズ」

2013年6月29日、7月6日の2回にわたって、装幀家の田中栞氏を講師に招いて、製本教室を実施

した。本の構造と、どのような手順で作られていくかを講義してもらった後で、実際にハードカバーの本など、2週にわたって数種類の本を参加者各自で制作した。学生の参加は10名程度であったが、実際の製本の工程を体験でき、書物の見方が変わったなどの感想が寄せられた。(吉田恭子・大出敦担当)

(2) 創作を通じた新しい文学教育

教育GPの実験授業として始まった本事業(経済学部「自由研究セミナー」不破有理担当)は文学作品の精読と創作を通じた教育プログラムとしてのシラバスが固まり始めた。春学期はAlfred Tennysonの英詩“Lady of Shalott”と秋学期は夏目漱石の『菫露行』を扱い、音読と精読、討議を繰り返し、創作することを念頭に、創作者の視点から作品の言語分析をおこない理解を深めた。創作のためのエチュードを織り交ぜながら創作の準備を進め、12月までに編集と印刷、製本までこなし1年を通して、学生は創作を行うことを念頭にテキストに向かい合い、教員と学外講師のアドバイスを受けながら何度も推敲を重ねることによって学生の言語力を磨くとともに、表現への意識を高めることができた。加えて、専門家の指導のもと編集ソフトを用いて学生自身が編集し製本までの工程を経ることで、書物の成り立ちを実体験として捉えることができたこと、またゼロから自分の作品を完成させることで達成感の大きい授業となった。さらに学年末の公開発表会でパワーポイント使用の口頭発表することは単にプレゼンテーション技術を身に付けるだけではなく、自らの作品への批評と創作者としての自分を客観的に分析する機会となる。担当の教員に加えて塾内外の参加者からの質問に答えることによって、作品を完成させる充実感の再確認の場にもなり、教育GPでめざした循環型の教育に近づいたといえる。作品は「アーサー王研究会創作文庫」として印刷本とWeb「アーサー王研究会」にて公開されている。

(<http://arthuriana.info/>)

(3) 身体知ワークショップの開催

古典ワークショップのシリーズ「シェイクスピアを遊ぶ!」第5弾として'Shakespeare Drama Workshop: Julius Caesar in Action'—ことばの力と恐ろしさを、身体知を通して学ぶ—シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』を12月22日・23日両日の13:30

～17:45に開催した。ニール・マクリン教授の情熱あふれる指導によって、まずワークショップは身体と声のウォーミングアップで始まり、ペアやグループでテキストを読み合わせ、脚色を考え、演技発表を二日間、集中的に実施した。初日から人の位置や動きや発声を変化させるだけで、シーザーが庶民派リーダーにも独裁者にも豹変しうる解釈となることを参加者は発見し、驚きの連続であった。2日目はシーザーを吊るはずのアンソニーの演説が徐々に民衆を扇動していく場面では言葉の力と人間心理の恐ろしさを体感することができた。昨今の社会情勢にも敏感であってほしい、という主催者側の隠れた意図も込められた今回の作品選定である。声と身体とことばを存分に用いることによって開かれる作品の意味を学ぶ体験はまさに「身体知」を知るワークショップとなった。国際センターが実施している英国オクスフォードにおけるサマープログラムに参加した学生が本ワークショップにも多く参加しており、シェイクスピア劇が持つ教育的意義を学生・教員共に理解したワークショップであり、今後とも継続したいと考えている。

(4) キャンパスを学ぶ実験授業「日吉学」——「キミは日吉を知っているか?～Discover HIYOSHI!～」

多くの学生は日吉キャンパスで学びながら、日吉を知らずに卒業していく。日吉キャンパスは三田の山から初めて学び舎を移転した場所であり、校舎の背後には広大な森の自然と第二次世界大戦の戦争遺跡を抱え、日吉の街はキャンパスと切り離せない歴史がある。実験授業「日吉学」では、歴史と自然と地形をそれぞれの中心テーマに据え、3日間にわたり土曜日の午後を用いて、講義とフィールドワークとグループワークを組み合わせる日吉の理解を深める授業を行った。

「多様なテラシー・学びの連携」にみられるように、慶應義塾内には多様な研究と教育の蓄積があるにもかかわらず、教育手法を各教員が学び合う機会はきわめて限られている。実験授業「日吉学」は別個に行われている授業・講義を、日吉というフィールドに焦点を絞り共同の授業を創ることにより、手法のみならず集積された研究と教育のコンテンツを教員間で学び合い学生に還元することにもつながると考えている。また、教養研究セン

ターが旨とする座学のみには依らない授業形態を模索し、「日吉学」では講義に加え、身体を動かして現地を歩き感得するフィールド体験、そしてグループワークによって個人の発見を共有化し自分の考えをさらに深める学習プログラムに発展させたいと考えている。実験授業の内容の詳細は24ページを参照していただきたい。

4. 成果発信

(1) 学び場プロジェクト「学習相談」の交流と発信

教養研究センターと日吉図書館が共同で展開している学び場プロジェクトの一環として学習相談（ピア・メンタリング）をおこなっているが、同様の取り組みを実施している、矢上・湘南藤沢（SFC）・日吉3キャンパス合同で学習相談員をパネラーとするトークショーが初めて行われた。この企画は「学びの連携」の副産物でもあり、このトークショーの光景はSFCからの応援により撮影およびU-streamでの発信をおこなうことができた。

(2) 半学半教の取り組みの紹介の刊行

学習相談員（ピア・メン）の長年にわたる相談体験にもとづいて、学生視点からのレポート克服本ともいえる書籍をピアメンが執筆者となり準備中で、慶應義塾大学出版から2014年度には刊行予定である。「学習相談」活動の集大成ともいえる。

(3) 教養研究センターのホームページの充実化

教養研究センターの活動を「面」として見やすくするように、全面改訂を行い、かつ所員の利便性を高めた。所員のページの新設により、学会・ワークショップ開催支援のための申請書などダウンロードできるようになった。また所員の研究を紹介するために、刊行物紹介の新設などによって所員間の研究交流の支援、学外への紹介欄を充実させた。

(4) その他

月刊『教職研修』2013年8月号＜特集2＞『教養のすゝめ』寄稿。

『卓越する大学2014』＜教育力＞58-59頁。

(不破有理)

学生論文 コンテスト

経過および今後の課題

教養研究センター開所 10 周年を記念して 2012 年度に行った学生論文コンテストであったが、2013 年度も引き続き実施した。学生論文コンテスト審査委員会としては、資料を要領よくまとめるだけでなく、まだ荒削りではあるものの自由で広がりのある発想に基づいた論文が集まることを期待して、2013 年度は「イメージを考える」というテーマで学生から論文を募った。2012 年度同様、対象は学部 1, 2 年生に限定したものであった。学部 1, 2 年生に限定したのは、早い段階から論文執筆の経験を積むことで、大学での学びの基本を習得してもらいたいという意図からであった。

論文提出の締切は 11 月 28 日・29 日の両日に設定し、それまでにこれまで論文執筆の経験のない学生にも論文に取り組んでもらえるように、2 回にわたって論文の書き方セミナーを開催した。第 1 回は 2013 年 6 月 28 日に山内志朗 (文学部教授) を講師に招き、来往舎シンポジウムスペースで開催された。第 1 回のセミナーは「初心者のために論文執筆入門」と題し、主として、テーマをどのように絞り込んでいくかということを主眼に置いて講演してもらった。第 2 回は 10 月 10 日に前野隆司 (システム・デザイン・マネジメント研究科教授) にお願ひし、「新しいアイデアの発想法—メタ思考法と構造シフト発想法を中心に」と題して主として発想法についてワークショップを交えた講演をしてもらった。またメディア・センターで活動している学生の学習相談員にも協力してもらい、論文執筆で行き詰まってしまった学生の相談を受け付けてもらった。

こうした活動を経て、最終的に提出された論文数は 14 本であった。論文コンテスト審査委員による審査の結果、このうち 6 本が最終審査まで残ったが、最終的には 2013 年度は受賞作はなしという残念な結果に終わった。最終審査の段階で発想力、調査力、論理力の観点からして、受賞に値する作品が 2 本ほど候補が挙がったが、審査委員会で調査したところ、剽窃行為と判断できる箇所が判明したため、選考から除外することになった。なお当該作品を執筆した学生には、今後のことを考え、盗作・剽窃の禁止と文章を作成する上で厳格な態度で臨むよう、教育的な指導を審査委員長名で行った。このことから学生のニーズをうまく汲み取りつつ、論文執筆の倫理と技法を実践する場作りが必要であることが分かってきた。(大出 敦)

慶應義塾大学 教養研究センター主催

学生論文コンテスト

ReCLA

「イメージ」を考える

2013年度 論文テーマ

「えっ! こんなことがあるのか!」「こんな切り口があったか!」
私たちが論文を読むときに期待するものは、じつを言えばこの質きとの出選いです。そしてさらなる願望は、みなさんの論文に「なるほど!」と知り、「これは参った!」と没頭されたいというものです。実指子もないことを思いついてしまふみなさんのやわらかい、受てこな顔は、そのような可能性を秘めた宝箱だと考えます。その宝箱を、ぜひ論文という知的生産のために開けてみませんか。

応募資格	慶應義塾大学 学部在籍中の 1 年生・2 年生	字数	8000 字程度 (日本語)
賞	最優秀賞 1 名 (賞状 および 賞金 10 万円)	優秀賞	若干名 (賞状 および 賞金 5 万円)
論文受付	2013 年 11 月 28 日 (木) - 11 月 29 日 (金) 必着	発表	2014 年 1 月中旬を予定
問い合わせ先	教養研究センター 学生論文コンテスト担当 TEL: 03-3462-1141 / FAX: 03-3462-1142 E-mail: ronbun-libarts@libarts.keio.ac.jp	URL	http://lib-arts.keio.ac.jp/ [教養研究センター] 検索
活動企画	●論文の書き方のセミナー / 6 月 28 日 (金) と 10 月 10 日 (木) に開催 ●論文の書き方の推薦図書 / 教養研究センターの HP で紹介予定 ●論文の書き方の相談・アドバイス / 日々メディアセンター内の学習相談アワーにて		

主催: 慶應義塾大学教養研究センター 協賛: 富士ゼロックス株式会社、慶應義塾大学出版株式会社、慶應義塾大学印刷メディアセンター、慶應義塾大学印刷局

学生論文コンテストポスター



論文の書き方セミナー：山内志朗氏



論文の書き方セミナー：前野隆司氏

極東証券寄附講座関連の書籍、教養研究センター選書については、慶應義塾大学出版会ウェブページで書誌情報閲覧および購入が可能である。それ以外の教養研究センターの刊行物は学生相談室関連のものをのぞいては、すべて当センターのウェブページで閲覧が可能なので、センター活動に興味のある方々に塾内外で周知をしていただきたい。

1. 基盤研究

基盤研究からは、シンポジウム報告書が2つ、その他の報告書が1つ発行された。

■シンポジウム刊行物 11

基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画「国際基督教大学 (ICU) の3学期制とカリキュラム」
2013年6月27日発行

国際基督教大学学長の日比谷潤子氏をお迎えして、3学期制の在り方について行われたシンポジウムの講演内容が掲載されている。

■シンポジウム刊行物 12

基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画「学事日程と日吉キャンパス」 2014年3月27日発行
2013年6月27日におこなわれたシンポジウム「学事日程と日吉キャンパス」の講演記録。3つのパネル発表（金田一真澄（理工学部教授・日吉主任 [当時]）、種村和史（商学部教授・教養研究センター副所長）、佐藤望（司会）（商学部教授・教養研究センター基盤研究座長）の講演）のあとに、清家篤塾長にディスカッサントとして加わっていただき、60名を超える教職員と行った意見交換の様子が収録されている。

■その他の報告書

2010～2011年度基盤研究報告書「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究——『2010年度大学カリキュラム研究に関する教員アンケート調査』の結果とそれに基づく提言——」 2013年9月29日発行

2011年に慶應義塾大学教養研究センターが実施した大学教員向けのアンケートに基づき、伊藤行雄（経済学部教授 [当時]）、佐藤望（商学部教授）を中心に編成されたワーキンググループがおこなった分析と提言がまとめられている。

2. Newsletter (ニューズレター)

主に日吉所属の教職員とセンター所員への広報が目的のNewsletterは、年2回の発行している。

■22号 2013年5月15日発行

開所10周年企画として「論文コンテスト」「学びの旅のすすめ：みちのく見聞録」「アカデミック・スキルズのあゆみ」が特集として掲載されている。

■23号 2013年11月30日発行

2013年度より本格的にはじまった「情報の教養学」「日吉学」そして、2年目を迎えた「学びの連携」プロジェクトなどの詳細が掲載されている。

3. CLA アーカイブズおよび教養研究センター Report

2013年度は、2つのCLAアーカイブズ報告書と1つのReportが刊行された。いずれも教員サポートに関するものである。

■CLA アーカイブズ 29

「学びの連携」プロジェクト公開セミナー 塾生による塾生のための半学半教の場作り——慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後——」 2013年7月31日発行

■CLA アーカイブズ 30

「教員サポート15・学生相談室における心理的支援——支えること・つなぐこと——」 2014年3月31日発行

■教養研究センター Report No.20

「教員サポート14・メディア・リテラシーワークショップ 情報セキュリティについて知ろう、考えよう」 2013年10月31日発行

4. 報告書

■「教養研究センター2012年活動報告書」

2013年8月21日発行

■「庄内セミナー 2013年」(2013年度未来先導資金公募プログラム) 2013年12月3日発行

2008年度に行われた「鶴岡セミナー」を原点とする庄内セミナーは、2013年度で6年目を迎える。今年のテーマは、「庄内に学ぶ生命—あらためて生と死を考える」。詳細は、28ページを参照していただきたい。

5. 極東証券寄附講座関連

■「アカデミック・スキルズ学生論文集」

2014年3月31日発行

2005年度より毎年発行されている「アカデミック・スキルズ学生論文集」は、センターが活動の中心に置く少人数制授業「アカデミック・スキルズ」で提出された論文を学生自らが編集して発行したもの。

■「生命の教養学」

2013年度のテーマは、「新生」であった。詳細は、20ページを参照していただきたい。

生命の教養学からは、以下の2冊の本が刊行された。

・教養研究センター、鈴木晃仁編『【対話】共生』

2013年8月20日発行

2011年生命の教養学公開講座の書籍化

・教養研究センター、高桑和巳編『成長』2013年9月30日発行

2012年生命の教養学公開講座の書籍化

6. 教養研究センター選書

教養研究センター叢書は、2013年度、新たに1冊が加わり、通算14冊となった。本叢書から、従来の紙媒体に加えて電子書籍化もされている。

■選書14

吉田恭子著「ベースボールを読む」

2014年3月29日発行

アメリカの「国民的遊戯」と称されるベースボールが文学作品や映像作品で表現される際に見られる特徴を分析し、そこに透けて見えるアメリカ文化の姿、人々の希望と欲望、そして“神話”としてのベースボールを考察する。

(篠原俊吾)

2013年度教養研究センター

刊行物一覧



シンポジウム報告書 11
(2013.6.27 発行)



シンポジウム報告書 12
(2014.3.27 発行)



2010～2011年度 基盤研究報告書
(2013.9.29 発行)



Newsletter22号
(2013.5.15 発行)



Newsletter23号
(2013.11.30 発行)



CLA アーカイブズ 29
(2013.7.31 発行)



CLA アーカイブズ 30
(2014.3.31 発行)



教養研究センター Report No.20
(2013.10.31 発行)



2012 年度活動報告書
(2013.8.21 発行)



2011 年度極東証券寄附講座
「生命の教養学」講義週
(2013.8.20 発行)



2012 年度極東証券寄附講座
「生命の教養学」講義週
(2013.9.20 発行)



2013 年度アカデミック・スキルズ
学生論文集
(2014.3.31 発行)



教養研究センター選書 14
「ベースボールを読む」
(2014.3.31 発行)

1 カリキュラム研究

学期制度の国際化に関する研究

事業内容

2012年に東京大学学長によって「秋学期入学問題」が提唱され、社会的にも論議が高まり、義塾内でも論議が行われた。

教養研究センター基盤研究がこれまでの大学カリキュラム研究の知見を活かして提示したフレックス学期制度（トリメスター制度）を提唱した。教養研究センター基盤研究では、さまざまな情報を収集することに努めていった。阿川前常任理事が座長をとめる「学事日程見直しWG」が7月中旬に義塾としての方向性を出そうとする中、教養教育、国際化と学期制の問題を提起し、発信する努力を続けていった。

シンポジウムの開催

学期制論議が学内の山場を迎えた6月27日に、シンポジウム「学事日程と日吉キャンパス」を開いた。金田一真澄（理工学部教授・日吉主任）、「学期制をめぐる学内論議について」、種村和史（商学部教授・教養研究センター副所長）「学期制論議において考慮されるべきポイント—日吉キャンパスの教育という視点から」、佐藤望（司会）（商学部教授・教養研究センター基盤研究座長）「教養研究センターにおけるカリキュラム研究と学期制」の3名の方向のあとに、清家篤塾長にディスカッサントとして加わっていただき、60名を超える教職員が集まる中活発な意見交換が交わされた。その内容は、報告書としてウェブ公表した。

成果・今後の展望・計画等

今回の成果は、多くの教職員がこの問題を通じて、国際的環境における大学制度の諸問題を考えるきっかけになった。全面秋入学以降を当初目指した東京大学の計画が挫折した今、義塾内での制度改革を迫られる必然性も失われることになった。

しかし、この問題を通じて、各学部がカリキュラムの国際化を意識したことも事実である。教養研究センターは、学部間の横の連携を、調査研究を通じて促進する役割を担っているが、今後も時事的問題、長期的問題両面を見据えた地道な調査と広報活動が必要である。

活動メンバー

高山博（文・人類学）、羽田功（経済・独語）、井奥洪二（経済・化学）、木俣章（法・仏語）、小林宏充（法・物理学）、木島伸彦（商・心理学）、佐藤望（商・音楽・座長）、鈴木伸一（医・独語）、金田一真澄（理工・露語）、不破有理（経・英語・所長）、種村和史（商・中国語・副所長）、大出敦（法・仏語・副所長）、篠原俊吾（法・英語・副所長）

（佐藤 望）



教養研究センター2013年度基盤研究
「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画

シンポジウム

学事日程 と 日吉キャンパス

パネリスト：
金田一真澄（理工学部教授・日吉主任）
「学期制をめぐる学内論議について」
種村和史（商学部教授・教養研究センター副所長）
「学期制論議において考慮されるべきポイント—
日吉キャンパスの教育という視点から」
佐藤望（司会）（商学部教授・教養研究センター基盤研究座長）
「教養研究センターにおけるカリキュラム研究と学期制」

ディスカッサント：清家 篤（慶應義塾長）

2013年6月27日（木）18：15～
日吉キャンパス 来往舎 大会議室

学内の方はどなたでもご参加ください

7学部の新入生を受け入れ、複雑なカリキュラムが並行して行われている日吉キャンパスは、学期制改革が行われた場合に最も大きな影響を受けます。カリキュラムの国際化や、時代に即した教育体制を審美に促進するために、何が必要であり、何を覚えるべきで、何をやるべきなのかということ、塾長を交えて話し合います。

問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



2 学びの連携プロジェクト

慶應義塾大学は、10の学部が6つのキャンパスに分かれて、それぞれ独自の理念と環境のもとに、高度な教育研究活動が展開している。またそこでは様々なねらいと特徴をもった先進的な教育メソッドが開発され、高い実績を挙げている。反面、各キャンパス・各学部間の交流が乏しいため、それぞれの試みが義塾全体で周知されることなく、孤立的に行われているのが現状である。それらを積極的に交流させお互いに学び合うことで、義塾全体の教育力を高め、またそれぞれのメソッドの持つ応用可能性を探ることができる。とりわけ、日吉キャンパスで多く行われている人文系科目の教育方法に新たな展開を生むことが期待できる。このような認識のもと、教養研究センターは、2012年度より「学びの連携プロジェクト」を立ち上げ、先進的な教育メソッドを用いた授業を行っている各地区の教員を講師に招き、公開ワークショップを開催している。

本年度は8月3日に、環境情報学部准教授の秋山美紀氏、SFC研究所キャリア・リソース・ラボラトリー上席研究員（訪問）の伴英美子氏を講師に招き、「学生の主体性を育む教育方法の探究・ケースメソッドの多様な応用可能性について—危機時における責任者の意思決定のケースを題材に」が開催された。

ケースメソッドは主に法律、医療の分野、あるいはビジネススクールなどで用いられる、意思決定の訓練を目的とした討議型の教育メソッドであるが、SFCキャンパスでは地域活性化、小中高での生徒の自発的学習姿勢の育成など、多分野でケースメソッドを積極的に活用し、大きな成果を得ている。今回のワークショップでは、高齢者介護事業を営む社会福祉法人の経営者の東日本大震災における意思決定を取り上げた教材を用いて、刻々と変わる状況の中でどのようにして、何を守るために、何に配慮し、どのように行動を決定していくかという、難しい問題が討議された。

震災直後の混乱を反映し、刻々と変化する状況を記述した教材が何度かに分けて配布され、参加者たちはそれを読み込んで、講師から出された問題に対して、それぞれの価値観によって異なる意見を提出し、白熱した議論を繰り広げた。議論を通して多様な視点が存在することに気づき、自分の考えを修正したり深化させたりしてゆく様子から、

学生の主体的な思考を活性化させる教育手法としてのケース・メソッドの効果をまざまざと見せつけられた。

ここで知ることができたことを日吉キャンパスの教育の向上にどのように生かしていくか、「学びの連携」の次なる展開が期待される。

(種村和史)



講師：伴英美子氏



講師：秋山美紀氏



コメンテーター：新保一成氏(商学部教授)

3 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新的话题を提供すると共に、教養としての「情報」について、教職員・学生が共に考えてゆく機会を持つことを目的とした講演シリーズである。本年度は講演会を8回、ワークショップを1回実施した。

春学期は、誰でも気軽に情報を発信できる世の中において、大量の情報の“利用”について様々な視点から講演会を開催した。第1回は竹下隆一郎氏（朝日新聞社）がTwitterに書き込まれる大量のつぶやきを活用した新しい取材方法とその課題について言及した。第2回はジャーナリストの津田大介氏がソーシャルデータの活用が実際の政治に反映できることを、実例を交えて解説した。第3回は赤倉優蔵氏（日本ジャーナリスト教育センター）がデータジャーナリズムという新しい取材・報道の手段を体系的に解説した。第3回と連動して、赤倉氏は同センターの藤代裕之氏と共にデータジャーナリズムを体験するワークショップを指導した。第4回は庄司昌彦氏（国際大学 GLOCOM）がオープンデータについて、豊富な事例を示しながら解説した。

秋学期は、情報を支えているもしくは活用している最新の技術に関する講演会を開催した。第5回はテクノロジーライターの大谷和利氏が各種インタフェースを、実演を交えて解説した。第6回は斎藤隆太郎氏（Acroquest Technology 株式会社）がシステム開発について平易な解説をした。第7回は今井倫太氏（理工学部）が、社会進出するロボットと人の間のコミュニケーションについて様々な観点から解説した。最後の第8回は新井紀子氏（国立情報学研究所）が東大ロボットプロジェクトを紹介した。

教室があふれ立ち見の回があった反面、空席が目立った講演もあった。しかし、各回とも参加者は熱心に聴講し、毎回とったアンケートを見る限り、好評であった。

ほとんどの講演はYouTube上で公開されており、情報の教養学のホームページ（<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/>）から視聴できる。

（高田真吾）



第2回 津田大介氏



第5回 大谷和利氏

1-1 アカデミック・スキルズ

アカデミック・スキルズは大学時代に身につけておくべき基礎体力としての論理力、調査力、説得力を養うものとして2005年度より極東証券寄附講座として設置されている科目である。2013年度は「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」3クラス、「アカデミック・スキルズ(英語)Ⅰ・Ⅱ」1クラス(いずれも通年授業、春学期Ⅰ、秋学期Ⅱ)、合計4クラスが開講された。なお2013年度は「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」は開講しなかった。

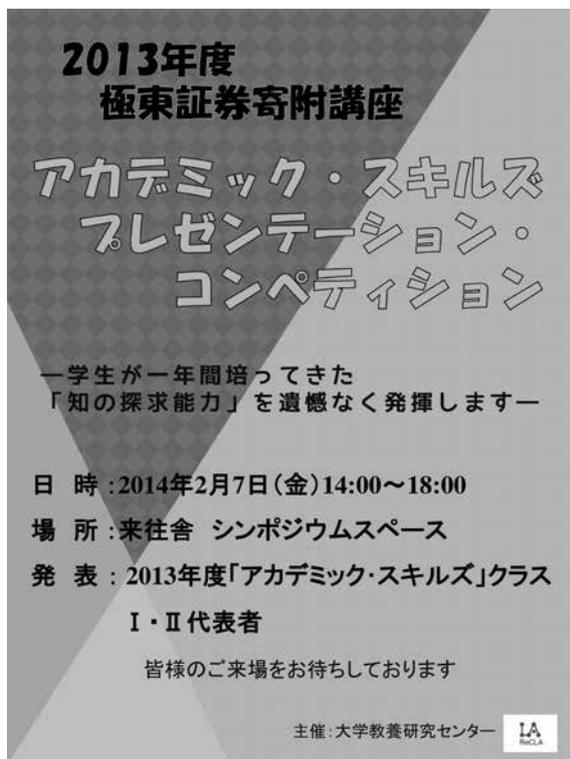
「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」は1年間をかけて論文・レポートの書き方とプレゼンテーションの基礎を学ぶ講座である。春学期は主題の立て方、資料検索の仕方、書式、論の構築といった論文・レポートの基礎を学び、秋学期は春学期の成果を踏まえ、自分でテーマを決め、論文制作に取りかかると同時に、プレゼンテーションの基礎を学ぶことになる。以上の原則を踏まえ、各クラスでユニークな取り組みが2013年度も行われた。

水曜5時限クラス(古賀裕章、原大地、岩下綾、徳永聡子)、木曜5時限クラス(種村和史、大出敦、熊野谷葉子、近藤康裕)は、上記の授業構成に近い形で展開された。一方、金曜5時限クラス(識名章喜、佐藤望、坂倉杏介)は、春学期はディベートを行い、秋学期は学生個人々の論文作成となった。また火曜2時限の「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ(英語)」(迫桂、鈴木亮子、不破有理、ルース・ファロン、デビッド・ノッター)は、アカスキの原則に則って、英語で授業が行われ、最終的な成果物も英語による論文・プレゼンテーションとなった。

2014年2月7日、菊池廣之極東証券会長、長谷山彰慶義塾常任理事を始め、多くの方々を招いてプレゼンテーション・コンペティションが例年通り開催された。各クラスの優秀者が成果を競い合い、一年の活動を締め括った。この日は同じく極東証券寄附講座である「身体知・映像」の成果である映画も上映された。金賞を市川聖武君(法1)、銀賞を河村拓君(法2)、銅賞を上條愛理君(法1)、中村仁之君(理工2)がそれぞれ受賞した。一方、この日論文部門の審査結果も発表された。金賞を高橋翔太君(理工1)、銀賞を中島希実子君(理工1)、銅賞を岡庭佑華君(法2)がそれぞれ受賞した。なお各クラスの学生が秋学期に制作した論文は、論文集『2013年度アカデミック・スキルズ』に収録されている。

2013年度はアカデミック・スキルズから生まれた成果として新井和広・坂倉杏介『グループ学習入門』(慶應義塾大学出版会)、西山敏樹・鈴木亮子・大西幸周『データ収集・分析入門』(同社)が挙げられる。

(大出 敦)



**2013年度
極東証券寄附講座**

**アカデミック・スキルズ
プレゼンテーション・
コンペティション**

ー学生が一年間培ってきた
「知の探求能力」を遺憾なく発揮しますー

日時:2014年2月7日(金)14:00~18:00
場所:来往舎 シンポジウムスペース
**発表:2013年度「アカデミック・スキルズ」クラス
Ⅰ・Ⅱ代表者**

皆様のご来場をお待ちしております

主催:大学教養研究センター LA



1-2 身体知：創造的コミュニケーションと言語力

2005年度に発足した「身体知」プロジェクトの成果の1つに、文科省大学教育推進プログラム（教育GP）「身体知教育を通して行う教養言語力育成」の採択（2009年度－2011年度）があり、また同プログラムの一環として、2010年度に正規授業化された本科目がある。

参加型・体験型の授業を通して、知力と身体感覚を相互的に磨き、言語力と非言語的コミュニケーション力の双方を育てるとともに、創造性を高めることを目的とする新しいタイプの科目である。学生たちに集中して特別な体験をしてもらうため、そして、年齢も人生経験も大いに異なる通学課程の学生と通信教育課程の学生が出会える豊かな教育的交流の場を作るために、夏期に集中的に行ってきた。

2013年度も、武藤浩史（法学部）、横山千晶（法学部）を担当講師とし、8月14日から19日まで、授業を実施した。履修者数は、通学課程14名、通信教育課程6名だった。教科書として、2013年7月に出版された拙著『ビートルズは音楽を超える』を用い、最初の3日間はこれを活用してビートルズを学問的に考える視点や方法を身に付けた。その上で、3日目後半から身体ワークショップを行い、学んだ知識を身体知（＝体験知）に繋げ、高めてゆけるように、以下のようなスケジュールで、授業を展開した。

【1日目】

第3時限：イントロダクション

第4時限：『ビートルズは音楽を超える』1「ばらばらにそろっている」

【2日目】

第3時限：『ビートルズは音楽を超える』2「つながる孤高」前半

第4時限：『ビートルズは音楽を超える』3「つながる孤高」後半

【3日目】

第3時限：『ビートルズは音楽を超える』4「つながる孤高」結論

第4時限：身体ワークショップ1「ていねいに生きる」

第5時限：授業前半振り返り

【4日目】

第3時限：身体ワークショップ2「ていねいに生きる」から生まれた課題創作シェアリング

第4時限：身体ワークショップ3「Help ウォーク」と「Yellow Submarine 体操」

【5日目】

第3時限：ビートルズバンドと歌う

第4時限：創作準備

【6日目】

第3時限：創作発表会1

第4時限：創作発表会2

第5時限：創作発表会3

第6時限：振り返り

例年通り、身体ワークショップを挟むと、教員と学生、そして学生間のコミュニケーションが俄然良くなり、自発的に、そして相互に協力しながら、何かを作り上げてゆこうという雰囲気が強くなる。それが、創作発表会の成果に繋がるわけだが、同時に、発表会でも質疑応答の時間を重視して、常に学問的な姿勢を忘れないように心がけた。

（武藤浩史）



ビートルズの音楽に合わせた創作ダンスを踊る学生たち

1-3 身体知・映像

「アカデミック・スキルズー批評と創作」として開講されてきた本クラスは2013年度より、「身体知・映像」に名称を変えることとなった。講義名が、より内容を明確に表したためか初回のオリエンテーションにはクラス定員の2倍以上の学生が参加し、履修希望者もおおよそ定員の2倍となる盛況ぶりであった。2011年からこのクラスでは、メディアリテラシー教育の一環として、映像言語のルールを観る側、撮る側から学んだ後に、前期はオリジナルの脚本に基づいて短い映像作品を作成し、後期は既存の文学作品を読み解いたのちに、脚本化し、それを20分ほどの映像作品にすることを目指している。クラスの目標は、映像言語を身に着け、その新しい表現媒体を使って作品を作ることにあるのだが、クラス運営に関してはグループによる共同学習を土台としている。後期の文学作品の映像化に関しても、作品解釈に関して徹底的なグループディスカッションを行い、一つの解釈に絞り込んでいく過程を踏み、グループで一つの作品を作り上げるという点で、単なる映像技術習得とは異なっている。今年は履修人数が19名と増加したため、前期のショート作品は3つのグループによる3作品を制作したが、後期の文学作品の映像化では、あえて19名を二つのグループに分け、9名、および10名のグループでの共同学習の可能性を探った。またレイモンド・カーヴァーの短編小説「大聖堂」をそれぞれの解釈から二つの異なる作品に仕立てるという点で、一つの文学作品が

どれほど異なる映像作品へと発展しうるかについても学生とともに考察した。2013年度も戯曲作家・演出家の松井周氏、および映像作家の小泉明郎氏を特別講師としてお迎えし、密に学生の教育にかかわっていただいた。こうして出来上がった作品は、前期、後期とも、成果発表会を行い、一般公開した。

(横山千晶)



撮影の基本を学ぶ

II 教育開発関連プロジェクト

1-4 生命の教養学

この授業科目は2013年度に第10回を迎えたが、企画の根幹に変更を加える必要は感じられない。念頭に置いている方針は前年度報告からの引用で示すことができる。「1) 科目名にある「生命」をあらゆる学問分野によってアプローチ可能なだけ広い意味をもつ概念として捉えること。2) 年度ごとに、その広い意味での「生命」現象にとって本質的と思えるサブテーマを設定すること。3) そのサブテーマをめぐって人文科学、社会科学、自然科学等をそれぞれに代表する研究者にお話しいただくこと。4) そのお話を承けて、受講する学生に「教養」的視座から「生命」について再考してもらうこと」。

講座のスタイルは前年度どおりオムニバス講義とした。残るはサブテーマの選定である。コーディネーター一同(本報告書末尾の「組織構成員」に記載あり)による案はまちまちだったが、よく見るとそのほとんどが1つの発想に収斂していくと思われた。その発想を説明的に叙述すれば、「広い意味での生命現象のなかにある、ガラッと変わる不連続な部分、そしてその部分を超えて生まれる、ないし廃される何か」とでもなる。これに「新生」の名を与え、2013年度のサブテーマとした。

この耳慣れないサブテーマでのご登壇をご快諾くださったのは次の11名のかたちである(敬称略、肩書きは当時[「慶應義塾大学」は省略])。宮下志朗(放送大学教養学部教授、書物史・ユマニズム研究)、牛場潤一(理工学部准教授、脳科学・リハビリテーション工学)、飯盛義徳(総合政策学部准教授、地域イノベーション、ファミリービジネスマネジメント)、清水聡(商学部教授、マーケティング)、渡辺靖(環境情報学部教授、文化人類学・アメリカ研究)、石川公彌子(学習院大学非常勤講師、日本政治思想史)、日高千景(商学部教授、産業史・経営史)、岸由二(名誉教授、生態学・都市再生研究)、上枝美典(文学部教授、哲学)、倉石立(文学部准教授、発生生物学)、藤原晴彦(東京大学大学院新領域創成科学研究科教授、分子生物学)。

受講者は40名強と前年度より減少したが、脱落者はほとんどなく、各回のミニレポートや期末の筆記試験にもほぼ全員が前向きに取り組んだ。質疑応答にも多数が積極的に参加した。

最後に、講義録『生命の教養学X 新生』も無事に刊行されたことを付記する。

(高桑和巳)



牛場潤一氏(4月26日)



飯盛義徳氏(5月10日)



清水聡氏(5月17日)

1-5 身体知：音楽

「身体知：音楽I・II」は、音楽を通じて築き上げてきている歴史および文化を、実践を通じて学ぶことを目的としている。成果発表は、公開演奏会という形で行っている。演奏会は、社会貢献活動の意味合いをも持たせてある。2013年度は、本格的なオペラの上演を含む計8公演を催し、慶應義塾大学の音楽教育の飛躍的発展を遂げた年度と位置付けることができる。公開演奏会は、具体的には以下の日程で行った。①2013年7月7日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー演奏会、「コレリ生誕300年記念演奏会」、②2013年9月7日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・アカデミー・ヴォーカルアンサンブル、東京女子大学公開講座、③～⑥2013年12月21・22日および2014年1月4・5日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・オペラプロジェクト、モーツァルト作曲オペラ《コジ・ファン・トゥッテ》全曲原語（日本語字幕付き）上演、⑦2014年1月12日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミー、室内アンサンブル・オーケストラ演奏会（於ヨコハマ創造都市センター）、⑧2014年1月19日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・アカデミー・ヴォーカルアンサンブルおよび古楽アカデミー・オーケストラ演奏会。

「身体知：音楽I・II」は、専門的な音楽訓練を行う授業として設置されたものである。音楽芸術の良き理解者を増やしていくことを目指している。音楽が人間の身体を通じて伝えてきた身体知と文化の歴史を学生たちに身に付けてきてもらっている。本年度は、モーツァルトのオペラ《コジ・ファン・トゥッテ》を原語で全曲を4回にわたって上演をするという大事業に取り組んだ。大学の正規授業の枠を利用しながらのオペラ上演は、慶應義塾大学では初のことであるとともに、世界でも珍しい試みであった。公演は4回ともほぼ満席で、多くの注目を集めた。オペラは、多くの人々を惹きつける題材であり、準備に非常に多くの時間を費やしたが、学生同士、または歌手たちとのかかわりのなかで学生たちは、さまざまな課題を自主的に解決することができた。

(石井 明)



オペラ上演の様子



オペラオーケストラのメンバー

2 実験授業

1. エディティングスキルズ

「ほんとうに本が好きになるために」というテーマで毎年1年間を通して展開してきたエディティング・スキルズであったが、今年度はスタッフ側のスケジュールの関係で縮小した形で行うことになった。

2013年6月29日と7月6日の2回にわたって恒例となっている装幀家田中栞氏による「製本教室」をワークショップの形で開催した。参加希望者は10名だった。第1回は糸綴の布張ハードカバー本を作成するものであった。田中氏が独自に開発したといってもよいメソッドで、ほぼ家庭にある道具のみでハードカバーの本を制作し、さらには本の構造を経験的に習得することができるようになっているプログラムであった。第2回は折り本、糊付頁本、中折本と、第1回目のハードカバー本より簡単な構造の本を作成し、学生は本の形態の多様性を学習した。また田中氏の好意により、当日、都合が悪く参加できなかった学生への補講や自分で製本する際の相談なども受け付けてもらった。

(大出 敦)

2. 創作を通じた新しい文学教育

Alfred Tennyson の英詩 “Lady of Shalott” を音読・精読・討議を通して作品のテーマを咀嚼し内面化させ自分の作品を書くことによって、読む行為を書く行為に変換することはたやすくはない。生みの苦しみを経ることで文学作品に秘められたテーマを探り当て、自分を見つめることでようやく表現することができる。表現するための手助けとしてさまざまな世界観を形成すべく、“Lady of Shalott”をテーマとした音楽・絵画・舞踏などの芸術作品を鑑賞・論評することを重ねている。毎年美術展に学生を連れて行くこともその一環である。2013年度は夏目漱石と英国世紀末芸術の展覧会で機糸に絡められ観る者を射抜くようなまなざしを向けるシャロットの女の絵画 (John William Waterhouse, 1894 年作) と対峙し、漱石がテニソンの詩とアーサー王物語の読みを『薙露行』に結実させたように、学生たちも「創作者」へと変貌することを期待。2013年アーサー王研究会創作文庫には、塔に閉じ籠るシャロットの女の状況を、通学で乗車する地下鉄の閉塞感に見立てた作品『電車』など力作が並んだ。推敲を重ねて完成させた自分の作品を編集ソフトに打ち込み、印刷した紙を手折りにして製本して冊子にするまでの手作業を無事終了した学生諸君の達成感に満ちた笑顔は教師冥利に尽きる。読む側から書く側にかわることは想像力と創造力と自分を見つめることを学生に要求する手ごわい作業である。この行程を辿り、学生がことばで自分を表現することのむずかしさを学んだとしたら、それがこの実験授業の一つの意義といえるかもしれない。(不破有理)



3. 古典ワークショップ—恐るべし、ことばの力：シェイクスピア・ドラマ・ワークショップ第5弾

12月22日・23日の両日、4部構成のシェイクスピア・ワークショップが開催された。冬至の寒さを払う学生の熱気。ニール・マクリン教授（オクスフォード大学・古典）の一声で身体と声のウォーミングアップが始まると、参加者は即座にシェイクスピア・ドラマにからめ捕られる。今回は『ジュリアス・シーザー』。初日から人の位置や動きや発声を変化させるだけで、シーザーが庶民派にも独裁者にも豹変する解釈が表出した。さらにわずか数行のやりとりからブルータスと暗殺者たちの駆け引きを読み解くマクリン氏は圧巻である。2日目は英文学史上、有名なアンソニーの演説を体験した。シーザーを弔うはずのアンソニーの演説が徐々に民衆を扇動していく場面では言葉の力と人間心理の恐ろしさを体感。日本語で理解をまず得るため輪読の後、英語で意図的に声の高低大小の変化を付けながら繰り返すと、声とことばが身体的直感に結びつき登場人物の感情となり飛び出してくる瞬間を体験する。まさに身体知の意味を知る瞬間となった。これは体験しないとわからない。英国の大学では学生によるシェイクスピア劇が頻繁に行われるが、古典を身体を動かして学ぶ、その意義を痛感したワークショップとなった。塾内外から参加があり、継続を望む声ばかりきわめて強く、今後も実施予定である。各日のワークショップは別紙プログラムを参照されたい。

(不破有理)



熱血指導中のニール・マクリン氏(オクスフォード大学・古典)

【2013年シェイクスピア・ドラマ・ワークショップ開催のお知らせ】
'Shakespeare Drama Workshop: Julius Caesar in Action'
 —ことばの力と恐ろしさを、身体知を通して学ぶ—
 シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』

【日時】
 12月22日(日)・23日(祝日) 13:30-17:45
 ※一日の参加も可
 ※動きやすい服装でご参加ください。

【プログラム】
 22nd December @ 来往舎シンポジウムスペース
 13:30-15:30 1. Introducing Caesar
 We begin with the beginning of Act I scene 2 ('Caesar and the Crowd'), then we will look back to Act I scene 1 ('The Crowd and Pompey')
 [Both scenes involve choices about the crowd and its activities; it will be an introduction to movement and status, and how to use the stage]
 1-a Act I scene 2 ('Caesar and the Crowd')
 1-b Act I scene 1 ('The Crowd and Pompey')
 15:45-17:45 2. Killing Caesar: 'Persuading Brutus'/'Persuading Caesar'
 We begin with the arrival of the conspirators at Brutus' house in Act II scene 1 ('Persuading Brutus') and continue with Caesar's changes of mind in Act II scene 2 ('Persuading Caesar')
 2-a Act II scene 1 ('Persuading Brutus')
 2-b Act II scene 2 ('Persuading Caesar')

23rd December @ 協生館 2F 多目的ホール 1
 13:30-15:30 3. Burying Caesar: Brutus's speech/Antony's speech/the crowd
 Act III scene 2—first Brutus' speech, then Antony's[here we shall work on delivering these famous speeches; we shall also be looking at the response of the crowd]
 3-a Act III scene 2 (Brutus's speech)
 3-b Act III scene 2 (Antony's speech/the crowd)
 15:45-17:45 4. Burying the Republic: the politics of the play/anti-climax?
 We shall look at the quarrel between Brutus and Cassius in Act IV scene 2 and its resolution, and the confrontation between the four generals just before Philippi (Act V scene 1)
 [this will be an opportunity to look at the politics of the play; and also at how Shakespeare avoids anti-climax]
 4-a Act IV scene 2 (the quarrel between Brutus and Cassius)
 4-b Act V scene 1 (the confrontation between the four generals just before Philippi)

【スタッフ】
 講師: Neil B. Mclynn (オクスフォード大学)
 コラボレーター: Claire Sotinel (パリ XII 大学) Nicholas Henck
 横山千晶 不破有理

【テキスト】 *Julius Caesar*, the Penguin—ed. Martin Wiggins, 2005.
 新潮文庫『ジュリアス・シーザー』

© 慶應義塾大学教養研究センター

ワークショップのプログラム



熱血指導中のニール・マクリン氏



参加学生たちとマクリン氏

4. 実験授業「日吉学」始動

日吉地域をフィールドとした3回3日間の実験授業を「キミは日吉を知っているか?～Discover HIYOSHI!～」と題して実施した。11月2日「探検! 発見! (1) 日吉台地下壕」安藤広道(文学部・民族学考古学教室)、9日(2)「地図から見た日吉」今尾恵介氏・太田弘(普通部・地理)、16日(3)「日吉の森を歩こう!」長沖暁子・福山欣司・有川智己(経済学部・生物学)のプログラムを各分野の専門教員に協力いただき開催した。

各日とも土曜日の午後を用いて、13:30～17:00の長時間にわたる「授業」であったが時間が足りないほどの内容となった。普通部生(付属中学生)から大学院生、教職員の混成チームで各日ともに充実した配布資料と講義とフィールドとグループワークを組み合わせた活動を行い、3日間すべてに出席した参加者には「修了証「日吉学」入門編」(Certificate: HIYOSHI Studies Introductory Course)日英両面版を授与した。冒険・探検というキャッチフレーズに見られるように、参加者が関心をもって取り組めるような仕掛けを考え、長年大学内に蓄積された研究と教育の成果を「日吉学」という形で結び合わせることで、通学しているだけでは接することのできない日吉の魅力を学生・生徒が発見し共有しあうことができたことは最大の成果であったといえる。さらに参加者を混成チームとしたことで、普通部生の斬新な視点に大学生も刺激を得て、あらためて日吉についての理解を深めることができた。

考古学研究会のメンバーがチームリーダーとして活躍をし、かつまた見事な「活動報告書」をまとめてくれた。単なる見学会の域を超えた、まさに主体的に学生が活動をする実験授業の場として手ごたえを感じる企画となった。アンケートには非常に高い満足度が見られ、記述によるコメントも多く寄せられた。2014年度も、観察を通して問題を発見し考える学生を育てるための拡充版を実施する。

(不破有理)



2013年11月2日「日吉台地下壕」——発掘された品々を前に



2013年11月9日「日吉の街歩き」——地図を片手に写真撮影



2013年11月16日「日吉の森」
——おすすめ散歩道の発表する普通部生

II 教育開発関連プロジェクト

3「学び場」プロジェクト

学習相談アワー（ピア・メンター）

2008年より始まった学習相談の取り組みも、本年度で6年目を迎えた。学生の認知度も増し、活動も漸く軌道に乗り、さらに一段のレベル・アップが実現している。

本年度は15名、うち学部生12名、大学院生3名がピアメンターとして登録し、春学期は5月7日から7月19日まで、秋学期は9月24日から1月17日まで（月から金の13:00~18:00）、相談活動が行われた。春学期の相談件数は214件、秋学期は233件、これはすべて3分間以上の実質的な相談の数である。ここ数年、安定した相談件数を維持している。

このような実績は、相談員の地道な活動が実を結んだものである。例年のポスター、チラシに加え、本年度はピア・メンターがアカデミック・スキルの授業に赴き、学術的なレポート作成にまさに取り組んでいる学生に対して、学習相談の紹介を行った。また、春秋2回ずつピア・メンターによるレポートの書き方講座がメディアセンター内で開催され（春：5月27日、31日、秋：11月13日、14日、15日、18日）、いずれの回も好評を博した。これらの活動は、学習相談の認知度を上げるのにきわめて効果的であった。

相談活動を通してピア・メンターは、学生が大学での学習・レポート作成においてぶつかる共通の問題、およびそれに対する効果的なアドバイスの仕方についての貴重な知見を積み上げている。それをより広範囲の学生に役立てさせるために、様々な企画展示を行っている。今年度は「はじめよう！レポ活」（6月12日～8月21日）、「単位が取ればそれでいいの？」（11月26日～12月27日）の展示を行った。さらに、それを書籍にまとめ外部に発信しようと、2014年度中の刊行を目指し鋭意作業中である。学生の視点に立って、レポートの書き方・大学における学びの方法を後輩たちへアドバイスする書籍は類がなく、大きな魅力を持つものとして世に迎えられるであろう。

本年度の新たな展開として、他キャンパスのピア・メンタリング活動（矢上キャンパスのS-Circle、SFCのWRC）との連携がある。「なぜ慶應の学生は勉強しないのか？」という刺激的なタイトルのもと、3キャンパスの相談員が一同に集まり、トークセッションが行われた（12月5日）。今後もそれぞれ独自の特

徴を持つ3キャンパスの活動が交流を続けることで、慶應義塾の半学半教は豊かな内実と多様性を持ったものになっていくであろう。

（種村和史）

「はじめよう！レポ活」
「単位が取ればそれでいいの？」
「なぜ慶應の学生は勉強しないのか？」
「学び場」プロジェクト
で解決しよう
レポート・プレゼンの困ったは
スケジュール
「はじめよう！レポ活」
「単位が取ればそれでいいの？」
「なぜ慶應の学生は勉強しないのか？」
「学び場」プロジェクト
で解決しよう

期間 5月7日（火）～7月19日（金）
時間 月～木 13:00～18:00
金 13:00～18:30
場所 日吉図書館1階レファレンスデスク
教養研究センター・日吉メディアセンター共催

教養研究センター・日吉メディアセンター共催
学習相談セミナー開催
—三田祭期間の課題を乗り切る—週間—
・11/13(水)15:00~16:00
レポート書き方講座基礎
・11/14(木)13:00~14:30
プレゼンテーションの作法
・11/15(金)16:30~17:30
レポート書き方講座基礎
・11/18(月)16:30~18:00
書評の書き方
*11/13と11/15は同一内容です。
場所：日吉図書館
1Fセミナーコーナー
*事前予約は不要です。
学生・教職員ならどなたでも参加できます。

3キャンパスの学生による合同トークセッション
なぜ慶應の学生は勉強しないのか？
12.5.Thu
16:30~18:00
日吉図書館1階ラウンジ
予約不要・参加自由
慶應の学生は本当に勉強しないの？
そもそも「勉強」って？
1・2年生のうちにやっておくべきことは？
学生支援に携わる学生がキャンパスを超えて議論します！
【出演者】
学習相談員（日吉）
S-Circle（矢上）
ライティング&リサーチ
コンサルタント（SFC）
湘南藤沢メディアセンター



II 教育開発関連プロジェクト

4-1 教員サポート講演会

大学をめぐる環境の激変に対応するための知識やスキルの習得が、大学教員に求められるようになってきている。慶應義塾の様々な部署、様々な人々の間に蓄積されている、そのための設備やノウハウを紹介する目的で、教養研究センターは、随時「教員サポート」を開催している。本年度は、日吉ITCとの共催によるメディアリテラシーワークショップと、学生部学生生活担当・学生相談室との共催による「学生を知ろう・学生相談室を知ろう」の講演会が開催された。

7月3日に、「メディアリテラシーワークショップ：情報セキュリティーについて知ろう、考えよう」と題して日吉ITC職員の山根健氏によって講演が行われた。これは、本年度6月に「慶應義塾情報セキュリティーポリシー」が制定され、情報資産保護に関する基本方針が示されたことを受けて企画されたものである。個人情報・学務関係の情報・研究データなど、教員は高度なセキュリティーが必要とされる情報を毎日のように扱っている。その際に求められる安全な情報の取り扱い方について、情報のプロの視点からアドバイスがなされた。なお、このワークショップの詳細については、教養研究センターReportを参照されたい。

また1月14日に、「学習相談室における心理的支援—支えること・つなぐこと」と題して、学生相談室カウンセラーの中村麻里子氏により講演が行われた。学生相談室の心理的支援のあり方が説明され、様々な心の悩みをかかえて訪れる学生に日々接している立場から、青年期特有の精神的状況と、最近の学生の悩みの特徴について報告があった。講演終了後の質疑応答では、日吉・矢上・三田・SFCの教職員により活発な意見交換と情報共有が行われた。なお、この講演会の模様は詳しくは、CLAアーカイブス30を参照されたい。

(種村和史)



教員サポート メディアリテラシーワークショップ
情報セキュリティーについて
知ろう、考えよう

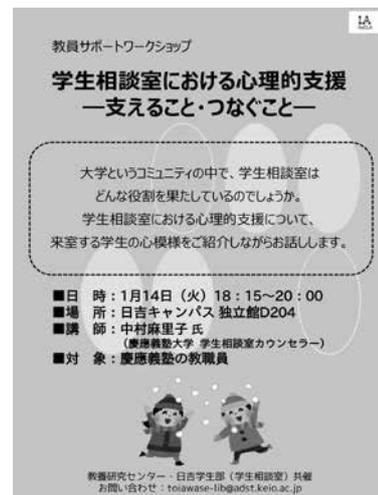
個人情報・学務関係の情報・大切な研究データ……
大学教員の毎日は、セキュリティーを要する情報との格闘の繰り返しです。
みなさんの情報の取り扱い方は正しい安心と言い切れるでしょうか？
折しも、「慶應義塾情報セキュリティーポリシー」が制定され、情報資産保護に対する基本方針が示されました。

「共同担当の授業でペアの先生と情報交換をするとき気をつけることは？」
「ファイルはどこに保存するのが安心か？」
「クラッシュに備えコピーを繰り返していたら、どれが最新のものがわからなくなった」
「よいパスワードの付け方とは？」

素朴かつ切実な不安・疑問に日吉ITCがアドバイスします。
この機会に、みなさんの情報セキュリティーを見直してみよう。
なお、当日は日吉ITC職員により、keiomobile2搭載のサポートも合わせて行われます。

■日 時：7月3日（水）18：30～20：00
■場 所：来社舎2F 大会議室
■講 師：山根 健（日吉ITC）
■対 象：慶應義塾の教職員
（慶應義塾大学で教えている方でしたらどなたでも！）
■申 込：教養研究センター toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
（所属、氏名を記載し、教員サポート参加と書いてお送りください）
※当日参加も大歓迎！

教養研究センター・日吉ITC 共催
お問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



教員サポートワークショップ
学生相談室における心理的支援
—支えること・つなぐこと—

大学というコミュニティの中で、学生相談室は
どんな役割を果たしているのでしょうか。
学生相談室における心理的支援について、
来室する学生の心模様をご紹介します。お話しします。

■日 時：1月14日（火）18：15～20：00
■場 所：日吉キャンパス 独立館D204
■講 師：中村麻里子氏
（慶應義塾大学 学生相談室カウンセラー）
■対 象：慶應義塾の教職員

教養研究センター・日吉学生部（学生相談室）共催
お問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



山根健氏（7月3日）

4-2 研究の現場から

2011年不破所長の発案で始まった来往舎の研究
者交流サロン「研究の現場から」は、和やかな雰
囲気の中で毎回2名の所員が自分の研究を紹介し談
話するという企画である。2013年度の会の概要は
以下の通り。

■第1回 2013年6月19日(水)

講師：徳永聡子(文学部助教)

「合綴本とイングランドの初期印刷文化」

講師：金山弘昌(文学部准教授)

「ガリレオとレオナルド——月面観測と『絵画
論』」

2013年度第1回は、文学部の徳永先生と同じく
文学部の金山先生にお話いただいた。徳永先生は、
近年の書物史研究で注目の集まっている「合綴本」
という現象に注目し、なぜこのような書物のかたち
が生まれたのか、その文化史的背景や作品受容の
具体例について、実例を見せていただき、解説を
していただいた。金山先生は、ガリレオ・ガリ
レイと美術の関わりについてお話いただいた。ガ
リレオの月面観測が、陰影の観察を核とする作業
仮説に基づいており、その作業仮説が、陰影に関
する絵画の理論、とりわけレオナルド・ダ・ヴィ
ンチの理論の強い影響下にある可能性について先
生の興味深いお話を伺うことができた。

■第2回 2013年10月24日(木)

講師：有光道生(法学部専任講師)

「フグとスイカ：俳句とブルースの『革命的』
な出会い」

講師：山口祐子(経済学部専任講師)

「ヴァイマル共和国時代の本づくり—ある文
芸ジャーナリスとの場合」

第2回の研究の現場では、法学部の有光先生と
経済学部の山口先生にお話いただいた。有光先生
は、アフリカ系アメリカ人による文学は大半の人が
持つイメージとは異なり、100年にもおよぶ俳句
の伝統があり、今回は、1960年代から70年代に
かけて、つまり、公民権運動、そしてより急進的に
革命を通して人種差別撤廃を目指したブラック・
パワーの時代に、黒人詩人たちが俳句をいかに理
解し、実践していたのかご紹介いただいた。山口
先生には、ヴァイマル共和国期(1918-1933)のドイ

ツ語圏で活躍したクルト・トゥホルスキーの自選
著作集を、文化史的側面からご紹介いただいた。
1920年代のドイツにおいて、新聞文芸欄を舞台に
活躍した職業作家たちが、新聞や雑誌に発表した
「記事」を「作品」として書物に収める際に生じた編
集や装丁、出版史などの特徴を追っていくと、現
代にも通じる読書や書物についての諸問題が読み
取れることを解説していただいた。

■第3回 2013年12月11日(水)

講師：小原正(経済学部専任講師)

「砂金と砂糖——メキシコ南部におけるスペ
イン人征服者の経済活動」

講師：芦野文武(文学部助教)

「多義語と意味的同一性——フランス語と日本
語の例から」

2013年度第3回は、経済学部の小原先生、文学
部の芦野先生に研究の一端をご紹介いただいた。
小原先生には、1540年代のメキシコ南部チアパス
地方において、アメリカ大陸のさまざまな経済事
業にのりだしていたスペイン人征服者がどのよう
に砂金採取と砂糖生産を発展させ、それらがどの
ように衰退していったのかをご紹介いただいた。
芦野先生には、ご専門の言語学の立場から、日本
語とフランス語の多義語「イヤ」「ダメ」「bon」を具
体例として、多義語が中心的な意味から周辺的な意
味へと派生すると考える従来の段階的な説明原理
を用いず、語の持つさまざまな意味を一つの原則
から統一的に説明する方法論をご紹介いただいた。

(篠原俊吾)

5 庄内セミナー

教養研究センター（以下、センター）では山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパス（以下、TTCK）を拠点として2008、09、10、12年度に開催した「庄内セミナー」（初年度は「鶴岡セミナー」）の実績と反省を踏まえ、2013年度には12年度に引き続き未来先導基金をいただいて、8月30日から9月2日にかけて「第四回庄内セミナー」を実施した。

セミナーの目的は「教養力」すなわち「自立・自律力」と「社交力」の涵養を通じた「教養」の基礎体力作りにある。その主要な趣旨は、① TTCK を拠点として新たな「学びの場」を開発すること、② 鳥海山・出羽三山、庄内平野、日本海に囲まれ、歴史・文化・自然・人の織りなす多彩な「生命(いのち)」に恵まれた庄内をフィールドとして多角的に「生命」について考える機会を提供すること、③ 現地での体験プログラムや講義、地元との交流を通して知的な吸収力・消化力、広範なコミュニケーション力を養うこと、の三点にある。

参加者は学部学生25名、大学院生2名、社会人7名の計34名。12年度に比べ、特に社会人が4名から7名へとほぼ倍増したことが最大の特徴である。学生・大学院生と社会人との交流を目的の一つに掲げてきた経緯を考えると、着実にそれが実現しつつあると言えるだろう。

具体的には以下の活動を行った：

(1) 事前準備：事前説明会・事前課題（「自分について」のレポート提出）。

(2) 合宿セミナー：8月30日から9月2日（3泊4日）。プログラム概要は次の通り。

①「生命」に関するマインドマップの作成

②日本人の死生観—即身仏をめぐって：

- ・注連寺における即身仏拝観と佐藤弘明住職による解説。

- ・日本人の死生観や身体観に関する文学部教授・山内志朗氏による講義・対話と議論。

③修験体験：山伏の指導によるレクチャーと一日修験体験（山伏修行体験塾・渡邊吉兆氏による指導）。

④庄内文化論：

- ・藩校・致道館教育の原点としての「徂徠学」：経済学部教授・小室正紀氏による講義・対話と議論。

- ・藩校・致道館における庄内論語の素読体験（指導：庄内藩校致道館統括文化財保護指導員・富樫恒文氏）。

- ・さまざまな文化遺産や施設の見学（致道博物館、藤沢周平記念館、松ヶ岡開墾場など）。

- ・地元講師による歴史・文化・社会などに関する講義：致道博物館館長・酒井忠久氏、庄内民俗学会幹事・春山進氏による講義・対話と議論。

⑤先端生命科学研究所見学：「生命」にまつわる最先端研究の体験・対話と議論。

⑥セミナーのまとめ。

(3) 事後課題・報告書（レポート集）作成：「生命について」をテーマとする課題レポートの提出と報告書の発行。

(4) 関連企画の実施：日吉図書館、大学生協（日吉）の協力を得て、11月に展示企画「慶應義塾と庄内」（セミナー報告・写真展・先端生命研紹介など）、庄内フェア（物産展・書籍展・庄内ランチ提供）を実施。

セミナーの成果としては以下の5点が挙げられる。

(1) 羽黒修験・即身仏などに見られる伝統的な死生観から TTCK の先端生命科学研究所の活動に見られる先端的な「生命」観に至る広範な「学び」の体験。

(2) 地元との交流による参加者の「地方・地域」への眼差しの広がりとそのによる相対的な視点の獲得（自立・自律力の涵養）。

(3) 社会人の参加による世代間交流の体験およびグループワークによるコミュニケーション力の涵養（社交力の育成）。

(4) フィールドワークを通じた体験的な「学び」の重要性の認識。

(5) 対話と議論を通じた言語化と発信能力の向上。

（庄内セミナー <http://keio-up.net/shseminar/news.html>）

（羽田 功）



1 三田の家

2013年10月24日(土)、「三田の家の最後のいちにち」と題されたクロージングパーティが行われ、「三田の家」の7年にわたる活動に終止符が打たれた。

「三田の家」は、慶應義塾大学教員・学生・卒業生有志によって、地元の三田商店街振興組合の協力のもと2006年9月に設立された。以降、大学の地域連携活動の拠点の一つとして、商店街のまちづくりに協力するほか、通常のキャンパスでは実現しがたい実験的で多様な授業、ワークショップ等を企画・実践する新しい学びの場として、また、社会人や外国人(留学生)との多岐にわたる交流プログラムを立案・実施し、昨今の学生に欠けがちな「社交力(sociability)」を涵養する場として、さまざまなユニークな活動を行ってきた。

活動を終えることになった理由は、建物のオーナーが土地の売却を決めたことによる。このため、2013年末をもって建物を返却することとし、ちょうど7年の区切りとなる10月にクロージングを行うことにした。

最終年度となった今年度の主な教員メンバーは、岡原正幸(文学部)、武山政直(経済学部)、坂倉杏介(グローバルセキュリティ研究所)、塩原良和(法学部)、手塚千鶴子(非常勤講師)であった。毎週月曜日は手塚を中心に外国人留学生と日本人学生との「小さな国際交流」の集いを、また、火曜日は塩原、金曜日は岡原がゼミを開催し、「夜の読書会」、「三田の家・隠れ納涼祭」といったプログラムを実施した。木曜日は坂倉が担当し、近隣住民を含めた交流の場を開催するほか「三田の家フューチャリング東北食べる通信」、「ミンダナオ島子ども図書館～貧しいけれど一人一人が輝いている子ども達のために～」などのイベントを行った。

今年度に実施した最も大きなプログラムは、岡原を中心にして行われた「オルタナティブ社会学会 丘の上より三田の家！」である。三田キャンパスで開催される日本社会学会にあわせて、10月11日～13日の3日間、レクチャーや座談会、上映会、パフォーマンスなど20ちかくのセッションが「三田の家」で開催された。常時40から50名の来場者が出入りし、3日間合計で250人以上が参加した。

最終日となった「三田の家の最後のいちにち」は、これまでに関わった教員や卒業生を含む学生スタッフのうち14名がマスターとなり、最後の日をオープンするという趣向で開催した。14時～21時の7時間、

正確には不明だが、「三田の家」を惜しむ200人以上の来場者で賑わった。このイベントの様子は、USTREAMでも配信された。

「21世紀的学生街をつくる」というコンセプトを掲げてスタートした「三田の家」は、一旦その役目を終えた。しかし、その思想は様々なプロジェクトに引き継がれていくことになりそうだ。地域連携の取り組みは、2008年から運営されている「芝の家」に加えて、2014年4月にスタートする「ご近所ラボ新橋」という拠点につながっていく予定である。三田自由大学の構想の一部は、港区芝地区総合支所との連携による「ご近所イノベーション学校」の設立へ受け継がれる。個別の活動では、「小さな国際交流」は、キャンパス周辺の寺社、集合住宅ラウンジにつき現在は町会館等を持ち、小規模な活動を継続中。また、「三田の家」で20回以上開催された「共奏キッチン」は、世田谷にオープンした「シェア奥沢」に拠点を移す。「三田の家」のワークスペース機能は、「芝三丁目場づくり研究所」へ引き継がれることになった。活動終了後の2014年1月には、「三田の家」の利用者が中心となって、「丘の上より三田の家☆三田の家の7年間の活動をふり振り返りつつ、コミュニティや場づくりについて対話する午後」と題されたイベントが開催され、70名以上の参加者が「三田の家」をどのように今後活かしていくかが熱心に議論された。

こうして、「三田の家」という拠点自体はなくなったとしても、そこで行われた先駆的な「新しい学び場」づくりから得られた経験やネットワークは、今後も様々なかたちで社会に活かされていくと思われる。これが、社会実験としての「三田の家」の大きな成果のひとつではないだろうか。そしてまた、この実験的な実践は、関係各位の深い理解と協力なしでは続けてこれなかったはずだ。改めてこれまで関わってくださったすべての方々に感謝したい。

(坂倉杏介)



2 カドベヤ

オルタナティブスペース「カドベヤ」は、2010年4月にコトラボ合同会社と慶應義塾大学により共同で設立された。同年6月より毎週火曜日の夕方、からだを動かすこと（ダンス、体操等）、ことばをかけること（詩、手紙の創作等）、ともに食べることでつながる「動く教室」を開催し、近隣の寿地区、石川町の住民、横浜で働く人々、学生など様々なバックグラウンドを持った人たちがアートを通して一つ屋根の下で交流することを目指してきた。この活動は、慶應義塾大学における文部科学省大学教育推進事業の社会連携活動の一部として行われたものであり、同教育推進事業が2012年3月末日を持って終了となるに伴い、「動く教室」にかかわってきたメンバーが、コンテンツの提供を継続すると同時に、毎週火曜を「オープン DAY」とし、より多くの人々が地元の居場所としてカドベヤを活用できる仕組みを考えた。そして社会連携の授業「人文科学特論—寿プロジェクト」および、「人文科学研究会（横山千晶担当）」を2013年度も開講することにより、この居場所を使った教育事業を展開した。「カドベヤ」の2013年の目標は以下のとおりである。

1. 継続的な「居場所」を提供し、「空間」と「時間」を共有する。
2. 「想像」を「創造」へとつなげる。
3. 誰でもが企画者となれ、その実現に参加者全員が協力する。
4. その過程で町、社会の中での自分の「居場所」を見出していく。

これらの目標を達成するために、本年度行った教育活動は主に以下の5つに分けられる。

1. 交流場所のより良い提供法をの模索
2. アーティストのみならず参加者も、ワークショップのファシリテーターとなる「誰もが主人公」の実践
3. 地元の子供たち、親たちの積極的な受け入れ（子供のみまもりと夏休みの親子企画の実践）
4. 地元の方々のお話を聞く試み
5. カドベヤにおける他大学との合同ゼミの開催

学生は石川町中区・南区界隈に住む人々（寿地区の住民を含む）、横浜で働く人々、NPO 団体、アーティストなどさまざまな人々と協力することにより、これらの事業の実現を図った。

活動の1に関しては昨年から、2012年3月までの「動く教室」の機能を毎週火曜日の19時からの「ストレッチと夕めし」に移したのに加え、その前の17時半から19時までを「足湯カフェ」として、足湯をしながらお茶を飲んだり会話をしたりする、気軽に立ち寄れる交流の場所を立ち上げ運営している。19時からのワークショップの前に90分のカフェ時間を設けることで、初めての方々も気軽にカドベヤに立ち寄れる雰囲気を作った。2に関しては、アーティストが中心となるワークショップだけではなく、「誰もが企画者となれる」ことを目標に、参加者がやってみようことを皆で広げて、参加型のワークショップや集いをより広く実現したことが挙げられる。今年は人文科学研究会に所属する3、4年生がワークショップを企画し、学生たちで運営するという形で自らも案内人となり、参加者のフィードバックを受けた。3は今年に入って親子での参加が増えてきたことから、新たに加わったカドベヤの機能である。また夏休みを利用して行われた親子企画では、二つのイベントを企画・運営した。ひとつの目標は手仕事の楽しさを味わうこと。そしてもうひとつは一流の音楽家による演奏を体ごと感じてもらうことである。8月20日には山形県より鶴渡川原人形伝承の会の代表者お二人を講師としてお招きして、土人形の絵付け体験を行った。（昼の部と夜の部に分けて開催。昼の部は就労継続支援B型事業所「てふてふ」、夜の部はカドベヤで開催した。）そして8月27日はバイオリストのアテフ・ハリム氏をお招きしてのバイオリン・コンサートを開催した。コンサートは、広報から当日の運営まで、カドベヤ参加者のお母さんと子どもたちで行い、コンサート後の交流会も和気あいあいとしたものとなった。これらの運営にも学生たちが積極的にかかわった。4は、地元のことを知る機会として、8月に戦争体験者の方より、当時のお話を聞く夕べを開催したことである。単なる戦争体験に終わらない、当時のハードとしてのまちの在り方、コミュニティの在り方、人々の助け合いの模様など、手に取るようにわかり、あらためて横浜、そして寿を含むこの界隈の歴史を体感した。そして5においては、これらの学びの成果を他大学との合同ゼミにおいて発表した。今年、昨年までの立教大学に加え、横浜国立大学、駒澤大学とも合同ゼミを開催し、それぞれの理論研究を発表し、その理論に基づいた実践の成果発表を行った。

（横山千晶）

Ⅲ 交流・連携関連プロジェクト

3 日吉行事企画委員会 (HAPP)

【プロジェクトの内容と目標】

日吉行事企画委員会 (HAPP) は、春の新生歓迎行事、秋の公募企画行事の二本柱によって、2013年度も運営した。新生歓迎セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を行っている。一方、公募企画セクションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画を HAPP が主催・企画協力するものである。新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終えている。この際、様々な行事の主権者として、日吉行事企画委員会は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することの2点に常に留意した。2013年度の新入生歓迎行事も、前年に続き、舞踏公演や各種講演会などを主催したが、特筆すべき企画として、ビショップ山田氏による舞踏ワークショップの企画の他、新たに二つの講演会シリーズを立ち上げた。その一つの〈ことばの世界〉では、長く斯界の第一人者として発言し続けてきた慶應義塾大学名誉教授、鈴木孝夫先生に、「新生歓迎講演会〈ことばの世界〉：武器としてのことば 日本の言語戦略を考える」というタイトルでお願いした。もう一つの〈物語の世界〉では、アーサー王文学研究の第一人者であり、本塾大学名誉教授の高宮利行先生に、「新生歓迎講演会〈物語の世界〉：親を知らずに成長する主人公たち～アーサー王ロマンスファンタジーの本質」というタイトルでお願いした。いずれの講演会も講師の学識と熱意によって大好評に終わった。今後、このシリーズは大事に育てていきたいと思っている。

【現在の目標達成度】

日吉行事企画委員会は、年3回、全体会議(6月、12月、1月)を行い、各企画内では、担当委員、事務局、責任者間で頻繁に打ち合わせを行っている。今年度も2011年度に再改訂した以下の理念に基づき企画を実施した。なお、過去の企画などについて、ホームページもあわせて参照してほしい (<http://happ.hc.keio.ac.jp/>)。

新生を中心に全学生を対象として、様々な企画を通じて多様な「知」の在り方を提示し、大学のみならず生涯にわたる「学習」の意味と可能性を考える機会を提供することを目指しています。各種

行事は「心と体と頭と…」を総合テーマとして、平成6年度以降、毎年様々なイベントを運営しています。その趣旨は主に以下の3点です。

(1) 知識・言語表現偏重型学習からの脱却：「知」の表現には、言語によるもの、身体によるもの、さらには先端的な技術を用いた表現など多様な形態が存在します。このことを具体的に体験することのできる機会を設けることで、「知」やその「学習」の意味を考えさせるきっかけとなることを目指しています。

(2) 学生・教職員による一体型の活動：学生と教職員が一体となって行事の企画・運営を行うことで、キャンパスや大学への帰属感を高めると共に、一連の共同作業自体を通じて学生による自主的な「学習」体験の場を展開することを目指しています。

(3) 地域・社会への大学・キャンパスの開放：行事を広く地域や社会に開放することで、「地域・社会に開かれた大学・キャンパス」実現の一助とすると共に、学生が地域住民・社会人との直接的な交流を通じて大学以外の世界に対する視野を獲得する貴重な機会となることを目指しています。

(小菅隼人)



新生歓迎行事 高宮利行先生講演会ポスター

【春の新生歓迎行事】

NO.	企画名	概要	日程 / 場所
1	新生歓迎プール体験会	塾生教職員を対象としたプールでのイベント	2013年4月3日(水)～5日(金) 16時～19時 協生館体育施設(プール)
2	〈ことばの世界〉「武器としてのことば 日本の言語戦略を考える」 鈴木孝夫先生講演会	鈴木孝夫先生による講演会： 50分、質疑応答40分	2013年4月17日(水) 18時15分～20時 日吉キャンパス来往舎1Fシンポジウムスペース
3	ビショップ山田舞踏講座 —土方巽舞踏大解剖 VII	ビショップ山田とそのカンパニーを 迎え、①小作品(20分)の実演、②講演、 ③公開ワークショップ	2013年4月25日(木) 17時～20時 来往舎イベントテラス、1Fシンポジウムスペース
4	〈物語の世界〉「親を知らずに成長する主人公たち—アーサー王ロマンス・ファンタジーの本質」 ～高宮利行先生講演会	高宮利行先生による講演会： 50分、質疑応答40分	2013年6月6日(木) 18時15分～20時 来往舎1Fシンポジウムスペース
5	環境週間 2013	環境に関するイベント	2013年6月24日(月)～29日(土) 日吉キャンパス
6	「日吉音楽祭 2013」	公募により、学生・教職員を募り開く 演奏会(1回) 慶應義塾コレgium・ムジクム・古楽 アカデミー演奏会(1回)。	2013年7月7日(日)・13日(土) 日吉キャンパス協生館・藤原洋記念 ホール

【秋の公募企画】

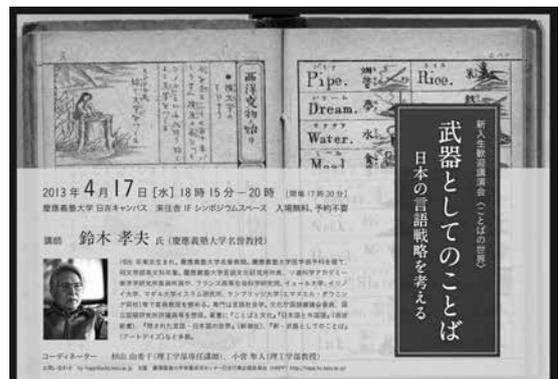
NO.	企画名	概要	日程 / 場所
1	ウケる！社会学講座	お笑いライブ	2013年10月25日(金) 来往舎イベントテラス
2	エサシトモコ展日吉猫物語	ワークショップと展示	2013年10月26日(土)、 11月2日(土)～9日(土) ギャラリー

【特別企画】

NO.	企画名	概要	日程 / 場所
1	塾長と日吉の森を歩こう	塾長と学生の交流、意見交換	2013年12月14日(土) ギャラリー



ビショップ山田舞踏講座公開ワークショップ



新生歓迎行事 鈴木孝夫先生講演会ポスター

日吉キャンパス公開講座 運営委員会

日吉キャンパス公開講座は、慶應義塾大学日吉キャンパスを中心として義塾が持つ知的リソースを広く地域社会に公開し、還元することを目標としている。2013年度においては、本講座「人の形——身体の変遷と認識、身体は今とこれから」が10月から12月にかけて無事に開講された（全18コマ）。身体という各学問領域にかかわるテーマを選んだことで、文系、理系、医学系、体育系を問わず塾の幅広い人材を存分に活かすことができた。また前年度に試行された特別講座（短期間に実施され、回ごとに受講可能であることが本講座と異なる）を継続し、公募のうえ「出版文化史の東西」を採択、これもつつがなく開催された。

【秋期講座】「人の形——身体の変遷と認識、身体は今とこれから」

「人はなぜ人の形をしているのか？」という疑問から出発し、これまで身体はどのように表現・認知され、そして今後、身体はどうなっていくのか考察した。当講座は土曜開講、各回90分×2コマ、全9回、受講申込は全9回セット（受講料8,000円）とし、定員300名に対し受講者数282名、全回出席者数69名（24.4%）、平均年齢は60歳（最高齢86歳、最年少18歳）であった。各回の詳細は以下の通り。

10月5日

3時限 「オープニング（本講座の見とり図）～人形とアニメーションの身体」

新島 進（経済学部准教授）

4時限 「現代人形劇表現における『人間』の身体」

友松正人、中村孝男（人形劇団ひとみ座）

10月12日

3時限 「医者と患者が描いた『人の形』の歴史」

鈴木晃仁（経済学部教授）

4時限 「宇宙という極限環境における身体の変化——有人宇宙開発と宇宙医学の視点から」

山田 深（JAXA 客員研究員、杏林大学医学部講師）

10月19日

3時限 「人を知るためのロボット研究」

石黒 浩（大阪大学大学院教授）

4時限 「文学と身体の変遷」

小倉孝誠（文学部教授）

10月26日

3時限 「オペラ：限界への挑戦」

石井 明（経済学部教授）

4時限 「身体障害と社会と技術」遠藤 謙（ソニー

コンピュータサイエンス研究所）

11月2日

3時限 「身体づくり」

松本 緑（理工学部准教授）

4時限 「iPS細胞と再生医療研究の最前線」

岡野栄之（大学院医学研究科委員長、医学部教授）

11月9日

3時限 「ルネサンス美術の巨匠たちと『身体』——レオナルドとミケランジェロの場合」

金山弘昌（文学部准教授）

4時限 「人とインタラクションするロボット」

今井倫太（理工学部准教授）

11月16日

3時限 「バレエにおける身体表象——舞踊言語の謎を読む」

設楽（小山）聡子（慶應義塾大学非常勤講師）

4時限 「科学技術はどこまで人型に迫れるか」

井奥洪二（経済学部教授）

11月30日

3時限 「トップアスリートの身体——クルム伊達公子選手を始めプロテニスアスリートがどのように身体を鍛えてツアー転戦をしているのか」

坂井利彰（体育研究所専任講師）

4時限 「ブラインドサッカーから考える身体知」

松崎英吾（日本ブラインドサッカー協会事務局長）

12月7日

3時限 「人形愛の精神分析」

藤田博史（精神科医・精神分析家）

4時限 「文楽の過去 現在 未来」

豊竹英大夫 (文楽大夫)、伴野久美子 (現代美術家)

(新島 進)

【特別講座】「出版文化史の東西」

近年のデジタル化の発達により、国内外の出版事情は大きく変わりつつある。本とは何か、出版はどこへと向かうのか。先人たちが育んできた出版文化の歩みを振り返ることで、こうした問いを考えるべく、全3回にわたる特別講座「出版文化史の東西」を開催した。毎回の講義では、塾内外の専門家をお招きし、中世から近現代にまで至る日本とイギリスの出版文化の特徴や変遷について、具体的な書物の観察を通してお話いただいた。また教室内では、講師の私蔵書や日吉メディアセンターの貴重書の展示も行われた。詳細は以下の通り。土曜開講、各回90分×2コマ、全3回、受講申込は各回ごと(受講料2,000円)とし、受講者数は222名であった。

12月21日

3時限 「活版印刷文化のあけぼの——『全集』の誕生を探る」

徳永聡子(文学部助教)

4時限 「印刷文化史と文学の邂逅」

林望(作家)、高宮利行(慶應義塾大学名誉教授)

2014年1月11日

3時限 「江戸の出版文化に親しむ——京伝が描く本と浮世絵の世界」

津田真弓(経済学部教授)

4時限 「ジャーナリズムの起源と近現代出版文化の黎明」原田範行(東京女子大学教授)

2014年1月18日

3時限 「キリシタン版の研究からわかること——和書と洋書のあいだ」

折井善果(法学部准教授)

4時限 「日本の絵入本の歴史——絵本が出版されるまで」佐々木孝浩(附属研究所斯道文庫教授)

(徳永聡子)

慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座(全9回)

人の形

2013年10月5日(土) 12月7日(土)

身体表現と認識、身体は今とこれから

人はなぜ人の形をしているのでしょうか? そんな疑問から出発し、本講座では身体というものを文学・音楽・医学を問わず、さまざまな学際アプローチを通して考察していきます。これまでに身体とはどのような表現、認知され、そして今後、身体はどのように変わっていくのでしょうか。

講座内容

10/5	① キーワード「人型に人らしさの身体」 ② 現代人形表現における「人型」の身体	新島 進 慶應義塾大学文学部准教授
10/12	① 読者と読者が描いた「人の形」の歴史 ② 字面という論議環境における身体の変遷	鈴木寛士 山田 淳 慶應義塾大学文学部准教授
10/19	① 人を知るための「からだ」研究 ② 文学と身体表現	石里 浩 小倉 幸廣 慶應義塾大学文学部准教授
10/26	① オペラ・演劇への挑戦 ② 身体研究と社会と芸術	石井 明 渡部 謙 慶應義塾大学文学部准教授
11/2	① 身体について ② 身体研究と西洋医学研究の最前線	松本 健 岡野 充之 慶應義塾大学医学部准教授
11/9	① キーワード「身体」の「からだ」研究 ② 人とインタラクションするロボット	金山 昌 今井 隆太 慶應義塾大学文学部准教授
11/16	① アパレルにおける身体表現 ② 科学技術はどこまで人間に近づくか	設楽 小川 聡子 青嶋 一 慶應義塾大学文学部准教授
11/23	① トピアスとしての身体 ② アラビヤの「からだ」を考へる身体論	坂井 利彰 松崎 英吉 慶應義塾大学文学部准教授
12/7	① 人形愛の精神分析 ② 言葉の過去、現在、未来	藤田博史 豊竹英大夫、伴野久美子 慶應義塾大学文学部准教授

募集要項

募集対象 社会人ほか
募集期間 2013年 単元毎募集
講 義 慶應義塾大学日吉キャンパス内
開 講 2013年7月29日(月)～9月24日(水)まで(必要)
講 料 各2,000円、聴取無料(要予約)
申込方法 慶應義塾大学日吉キャンパス内各キャンパスの「申込フォーム」をダウンロードし、記入の上、Eメールにて送信してください。
申し込み期限 受講したい単元の申し込み期限は、受講料の納入期限(申し込み期限)とさせていただきます。申し込み期限は、申し込み期限の1週間前までです。
申し込み方法 申し込みは、慶應義塾大学日吉キャンパス内各キャンパスの「申込フォーム」をダウンロードし、記入の上、Eメールにて送信してください。
申し込み期限 受講したい単元の申し込み期限は、受講料の納入期限(申し込み期限)とさせていただきます。申し込み期限は、申し込み期限の1週間前までです。
申し込み方法 申し込みは、慶應義塾大学日吉キャンパス内各キャンパスの「申込フォーム」をダウンロードし、記入の上、Eメールにて送信してください。

慶應義塾大学教養研究センター
慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座 事務局
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
Tel:045-563-3078 Fax:045-563-3079 E-mail: h-act@213.aria.keio.ac.jp
URL: http://lib.aria.keio.ac.jp/ 【教養研究センター】

慶應義塾大学日吉キャンパス特別講座(全3回)

出版文化史の東西

2013年12月21日(土) 2014年1月18日(土)

日英交流400周年記念

インターネットや電子書籍の発達により、はやや書物をめぐる環境は劇的に変化しています。過去20年だけでも、国内外の出版事情は大きく変わり、紙の本の採来を危惧する声も少なくありません。そこで本講座では、中世から近現代に至る出版文化をテーマに取り上げ、その歴史と意義を考えます。なかでも日英交流400周年を記念し、日本とイギリスの「本」の「本」にこだわります。外国からさまざまな技法を吸収し、独自の出版文化を育んできた日本とイギリス、出版界布して花開いた江戸とロンドン。第一線で活躍する書物史家たちが、日英出版の諸相について論を展開するほか、書物の魅力を知り尽くす愛書家による好評談も届けます。

講座内容

12/21	① 活版印刷文化のあけぼの ② 印刷文化史と文学の邂逅	徳永聡子 林望・高宮利行 慶應義塾大学文学部助教 作家、慶應義塾大学名誉教授
2014年1/11	① 江戸の出版文化に親しむ ② ジャーナリズムの起源と近現代出版文化の黎明	津田真弓 原田範行 慶應義塾大学経済学部教授 東京女子大学教授
1/18	① キリシタン版の研究からわかること ② 日本の輸入本の歴史	折井善果 佐々木孝浩 慶應義塾大学法学部准教授 慶應義塾大学文学部准教授

募集要項

募集対象 社会人ほか
募集期間 2013年 単元毎募集
講 義 慶應義塾大学日吉キャンパス内
開 講 2013年10月21日(月)～各講座5日組まで(必要)
講 料 各2,000円、聴取無料(要予約)
申込方法 慶應義塾大学日吉キャンパス内各キャンパスの「申込フォーム」をダウンロードし、記入の上、Eメールにて送信してください。
申し込み期限 受講したい単元の申し込み期限は、受講料の納入期限(申し込み期限)とさせていただきます。申し込み期限は、申し込み期限の1週間前までです。
申し込み方法 申し込みは、慶應義塾大学日吉キャンパス内各キャンパスの「申込フォーム」をダウンロードし、記入の上、Eメールにて送信してください。

慶應義塾大学教養研究センター
慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座 事務局
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
Tel:045-563-3078 Fax:045-563-3079 E-mail: h-act@213.aria.keio.ac.jp
URL: http://lib.aria.keio.ac.jp/ 【教養研究センター】

1 教養研究センター 運営委員会委員

2013年4月1日～2014年3月31日在籍者

第6期(2011年10月1日～2013年9月30日)

第7期(2013年10月1日～2015年9月30日)

教養研究センター担当常任理事

長谷山 彰

教養研究センター所長

不破有理

教養研究センター副所長

種村和史

大出 敦

篠原俊吾

教養研究センター事務長

武内孝治

文学部長

関根 謙

経済学部長

中村慎助

法学部長

大石 裕

商学部長

樋口美雄(2013年9月30日まで)

金子 隆(2013年10月1日から)

医学部長

末松 誠

理工学部長

青山藤詞郎

総合政策学部長

國領二郎(2013年9月30日まで)

河添 健(2013年10月1日から)

環境情報学部長

村井 純

看護医療学部長

太田喜久子

薬学部長

増野匡彦(2013年9月30日まで)

望月眞弓(2013年10月1日から)

文学部日吉主任

斎藤太郎

経済学部日吉主任

青木健一郎

法学部日吉主任

武藤浩史(2013年9月30日まで)

下村 裕(2013年10月1日から)

商学部日吉主任

英 知明

医学部日吉主任

長井孝紀(2013年9月30日まで)

南 就将(2013年10月1日から)

理工学部日吉主任

金田一真澄(2013年9月30日まで)

萩原眞一(2013年10月1日から)

薬学部日吉主任

池田年穂(2013年9月30日まで)

杉本芳一(2013年10月1日から)

体育研究所所長

植田史生(2013年9月30日まで)

石手 靖(2013年10月1日から)

日吉メディアセンター所長

羽田 功(2013年9月30日まで)

横山千晶(2013年10月1日から)

外国語教育研究センター所長

境 一三(2013年9月30日まで)

鈴木直樹(2013年10月1日から)

自然科学研究教育センター所長

大場 茂(2013年9月30日まで)

小林宏充(2013年10月1日から)

日吉研究室運営委員会委員長

小宮英敏(2013年9月30日まで)

成田和信(2013年10月1日から)

日吉キャンパス事務長

安田 博(2013年10月31日まで)

富山優一(2013年11月1日から)

日吉学生部事務長

渡辺秀人(2013年10月31日まで)

黒田修生(2013年11月1日から)

日吉メディアセンター事務長

市古みどり

日吉キャンパス事務センター課長

黒田修生(2013年5月31日まで)

今村江里子(2013年6月1日から)

日吉 ITC 所長 種村和史

極東証券寄附講座運営委員会委員長

住友生命保険寄附講座運営委員会委員長

不破有理

基盤研究(慶應義塾大学教育カリキュラム研究)座長

佐藤 望

基盤研究(社会・地域連携)代表

羽田 功

基盤研究(身体知プロジェクト)代表

武藤浩史

日吉行事企画委員会(HAPP)委員長

小菅隼人

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

新島 進

2 教養研究センター 組織構成員

2013年4月1日～2014年3月31日

所長：不破有理(経)**副所長**：種村和史(商)、大出 敦(法)、篠原俊吾(法)

コーディネーター：斎藤太郎(文・2013年11月1日から)、佐藤 望(商)、金田一真澄(理)、武藤浩史(法)、高桑和己(理)、吉田恭子(文)、羽田 功(経)、長田 進(経)、鈴木晃仁(経)、片山杜秀(法・2013年11月1日から)、横山千晶(法)、前野隆司(SDM研究科)、高田真吾(理)、小菅隼人(理)、新島 進(経)、境 一三(経・2013年9月30日まで)、鈴木直樹(経・2013年10月1日から)、安田 博(キャンパス事務長・2013年10月31日まで)、富山優一(キャンパス事務長・2013年11月1日から)、武内孝治(教セ事務長)

広報担当：篠原俊吾(法)**日吉行事企画委員会(HAPP)****委員長**：小菅隼人(理)

委員：坂本 光(文)、石井 明(経)、不破有理(経)、下村 裕(法)、佐藤 望(商)、竹内美佳子(商)、森吉直子(商)、小宮 繁(理)、森 泉(理)、杉山由希子(理)、石手 靖(体研)、徳村光昭(保セ)、安田 博(キャンパス事務長・2013年10月31日まで)、富山優一(キャンパス事務長・2013年11月1日から)、黒田修生(運営サ・2013年5月31日まで)、今村江里子(運営サ・2013年6月1日から)、加賀斉天(運営サ)、河越太郎(学生部)、屋部 史(学生部・2013年10月31日まで)、山崎健二(学生部)、市古みどり(日吉メディアセ)、酒見佳世(日吉メディアセ)、日水邦昭(教養研究セ)、富澤英治(外セ・2013年5月31日まで)、尾崎彰男(社会・地域連携室)

極東証券寄附講座運営委員会**委員長**：不破有理(経)**委員**：種村和史(商)、大出 敦(法)、篠原俊吾(法)**「生命の教養学」企画委員****企画委員長**：高桑和己(理)

委員：片山杜秀(法)、鈴木晃仁(経)、小野裕剛(法)、小瀬村誠治(法)、高橋幸吉(商)、鳥海 崇(体研)、佐藤 聖(慶大出版会)、武内孝治(教セ事務長)

日吉キャンパス公開講座運営委員会**委員長**：新島 進(経)

委員：不破有理(経)、大出 敦(法)、納富信留(文)、石井 明(経)、秋山豊子(法)、寺沢和洋(医)、山下一夫(理)、前野隆司(SDM研究科)、佐々木玲子(体研)

住友生命保険寄附講座運営委員会**委員長**：不破有理(経)**委員**：種村和史(商)、大出 敦(法)、篠原俊吾(法)、佐藤 望(商)**教養研究センター事務局**

武内孝治(事務長)

日水邦昭、山口 中、傳 小史

3 2013年度の主な活動記録

Date	Events
4	<p>3日～5日 HAPP企画：新入生歓迎行事「新入生歓迎プール体験会」</p> <p>9日 極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅠ、Ⅱ」「身体知」「生命の教養学」開講(春学期)</p> <p>11日 2013年度ピア・メンターキックオフミーティング</p> <p>15日 教員サポート「大学における発達障害を抱える学生へのサポート」</p> <p>17日 HAPP企画：新入生歓迎行事「くことばの世界」「武器としてのことば 日本の言語戦略を考える」</p> <p>19日 【学会・ワークショップ等開催支援】<後援>ロードマップ～ミャンマーの現在と未来～マ・ティータ女史講演会</p> <p>24日 第1回所長・副所長会議 【情報の教養学 第1回公開講演会】「ソーシャルメディアと報道—むずかしい政治を分かりやすくしたツイッター取材」</p> <p>25日 HAPP企画：新入生歓迎行事「ピシヨップ山田舞踏講座—土方巽舞踏大解剖Ⅶ」</p>
5	<p>7日 春学期「学習相談」(7月19日まで)</p> <p>15日 【情報の教養学 第2回】「ウェブで政治を動かす！」 ニューズレター22号刊行 第1回コーディネートオフィス会議 ピア・メンター「レポートの書き方講座」</p> <p>27、31日</p>
6	<p>3日 基盤研究(カリキュラム研究)会議</p> <p>6日 HAPP新入生歓迎行事「「親を知らずに成長する主人公たち—アサー王ロマンス・ファンタジーの本質」～高宮利行先生講演会」</p> <p>7日～7/10 庄内セミナー関連企画「日吉図書館にてパネル展示と関連図書の展示」</p> <p>10～14日 学生健保主催「朝食サービス」で庄内米提供(庄内セミナー関連企画として)</p> <p>12日 【情報の教養学 第3回】「調査報道を変えたデータジャーナリズムの衝撃」</p> <p>15日 【情報の教養学ワークショップ 第4回】「やってみよう！データジャーナリズム実践講座」</p> <p>19日 第7回「研究の現場から」徳永聡子、金山弘昌 第2回所長・副所長会議</p> <p>24～29日 HAPP企画：新入生歓迎行事「環境週間2013」</p> <p>27日 基盤研究(カリキュラム研究)シンポジウム「学事日程と日吉キャンパス」 「教養研究センターシンポジウム11 国際基督教大学(ICU)の3学期制とカリキュラム」刊行</p> <p>28日 第1回 論文の書き方セミナー「初心者のための論文執筆入門」</p> <p>29日 実験授業 エディティング・スキルズ第1回「製本教室①」</p>
7	<p>1日 第1回 論文の書き方セミナービデオ補講(2時限・5時限)</p> <p>2日 【情報の教養学 第5回】「社会を可視化し、考え、行動するためのオープンデータ」</p> <p>3日 教員サポート「情報セキュリティについて、知ろう、考えよう」 第1回 論文の書き方セミナービデオ補講(2時限・5時限)</p> <p>6日 実験授業 エディティング・スキルズ第1回「製本教室②」</p> <p>7日 HAPP企画：古楽アカデミー・コレリ生誕300年記念演奏会</p> <p>12日 HAPP企画：ベートーベン・マラソンコンサート</p> <p>13日 HAPP企画：ベートーベン・マラソンコンサート</p> <p>17日 アカスキ全体会議</p> <p>25日 第2回コーディネート・オフィス会議</p> <p>31日 CLAアーカイブス29「学びの連携」プロジェクト公開セミナー 「塾生による塾生のための半学半教の場づくり—慶應義塾で展開されるピアサポートシステムの成果と今後—」刊行 「2012年度 活動報告書」刊行</p>
8	<p>1日 第3回所長・副所長会議</p> <p>3日 「学びの連携」プロジェクト2013年度第1回公開セミナー</p> <p>6日 エディティング・スキルズ「製本教室」補講 ピア・メンター春学期反省会</p> <p>20日 生命の教養学Ⅷ「共生」刊行</p> <p>30日～9/2 第4回庄内セミナー(山形県鶴岡市)</p>
9	<p>12～14日 初年次教育学会6回大会@金沢工業大学扇が丘キャンパス</p> <p>13日 第1回運営委員会</p> <p>29日 教養研究センター2010～2011年度基盤研究 慶應義塾大学の教育カリキュラム研究—「2010年度大学カリキュラム研究に関する教員アンケート調査」の結果とそれに基づく提言— 生命の教養学Ⅸ「成長」刊行</p> <p>30日</p>

Date	Events
10	<p>2日 【秋学期第1回情報の教養学】「スティーブ・ジョブズが iPhone / iPad のインターフェースデザインに込めた想いとその限界」</p> <p>5日 日吉キャンパス公開講座「人の形 身体の変現と認識、身体は今とこれから」</p> <p>9日 エルベ・アルビーアン講演会「ブルターニュにおけるアーサー王とアーサー王物語再考」</p> <p>10日 第2回 論文の書き方セミナー 「新しいアイデアの発想法—メタ思考法と構造シフト発想法を中心に—」</p> <p>16日 第4回所長・副所長会議</p> <p>23日 【秋学期第2回情報の教養学】「あなたの知らないシステムの世界」</p> <p>24日 第8回「研究の現場から」有光道生、山口祐子</p> <p>30日 宮城大学来訪</p> <p>31日 「教養研究センター Report No.20 教員サポート」刊行</p>
11	<p>2日 【日吉学】「探検！発見！ (1)日吉台地下壕」</p> <p>4日～16日 庄内セミナー関連企画第4回庄内フェア</p> <p>9日 【日吉学】「探検！発見！ (2)地図から見た日吉」</p> <p>11日 第3回コーディネート・オフィス会議</p> <p>16日 【日吉学】「探検！発見！ (3)日吉の森を歩こう！」</p> <p>27日 【秋学期第3回情報の教養学】「ロボットは社会進出できるのか？」</p> <p>28、29日 【学生論文コンテスト】「イメージを考える」応募締切</p> <p>29日 「ニューズレター 23号」刊行</p>
12	<p>3日 2013年度「庄内セミナー」報告書刊行</p> <p>5日 3キャンパスの学生による合同トークセッション「なぜ慶應の学生は勉強しないのか？」</p> <p>6日 論文の書き方講座</p> <p>7日 【学会・ワークショップ等開催支援】日本ジョージ・エリオット協会 第17回全国大会</p> <p>7日 【学会・ワークショップ等開催支援】第17回 日本レーザー・スポーツ医科学学会</p> <p>11日 第9回「研究の現場から」小原正、芦野文武</p> <p>14日 【学会・ワークショップ等開催支援】国際アーサー王学会日本支部大会の講演会およびシンポジウム</p> <p>15日 ハイドン、モーツァルト、ボッケリーニの弦楽四重奏曲および弦楽五重奏曲—弦楽四重奏セミナー成果発表演奏会—</p> <p>17日 「日吉学」反省会</p> <p>18日 【秋学期第4回情報の教養学】「ロボットは東大に入れるか」</p> <p>18、19日 THE GOOD DOCTOR (外国語教育センター設置科目「英語ドラマ」クラス)</p> <p>21、22日 慶應義塾大学コレギウム・オペラプロジェクト「ゴジ・ファン・トゥッテ」</p> <p>21日 【日吉キャンパス公開講座】出版文化史の東西</p> <p>22、23日 【Shakespeare Drama Workshop】Julius Caesar in Action</p> <p>26日 第5回所長・副所長会議</p>
1	<p>4、5日 慶應義塾大学コレギウム・オペラプロジェクト「ゴジ・ファン・トゥッテ」</p> <p>7日 学生論文コンテスト審査委員会</p> <p>11日 【日吉キャンパス公開講座】出版文化史の東西</p> <p>14日 教員サポートワークショップ 「学生相談室における心理的支援—支えること・つなぐこと—」</p> <p>15日 アーサー王研究会 2013年度学生創作公開発表会</p> <p>18日 【日吉キャンパス公開講座】出版文化史の東西</p> <p>21日 HAPP委員会</p> <p>28日 第6回所長・副所長会議</p>
2	<p>2日 アカスキ論文集編集委員会</p> <p>4日 第4回コーディネート・オフィス会議</p> <p>ピア・メンター反省会</p> <p>6日 インド舞踊に魅せられて(小野雅子来日公演)</p> <p>7日 【極東証券寄附金講座アカデミック・スキルズ】プレゼンテーション・コンペティション</p>
3	<p>12日 第2回運営委員会</p> <p>25日 ピア・メンターキックオフミーティング</p> <p>27日 2013年度基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画「学事日程と日吉キャンパス」報告書刊行</p> <p>31日 CLA アーカイブス 30 教員サポート 15 「学生相談室における心理的支援—支えること・つなぐこと—」刊行</p> <p>2013年度アカデミック・スキルズ論文集 刊行</p> <p>「センター選書 14 ベースボールを読む」吉田恭子著 刊行</p>

慶應義塾大学教養研究センター
2013年度 活動報告書

2014年8月22日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 不破有理

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会

印刷・製本 (株)太平印刷社

©2014 Keio Research Center for
Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

ISBN978-4-903248-47-9

